

地質調査所新刊圖書

大日本地形詳圖

定價 和文金參拾錢
英文金參拾五錢
郵税金 貳錢
青森圖幅●壹岐圖幅●周防洋圖幅●輪島圖幅●上縣圖幅縣圖幅

大日本地質詳圖

定價 和文金四拾五錢
英文金 貳錢
入吉圖幅●珠州岬圖幅●周防圖●上縣圖幅

大日本地質圖幅說明書

郵税金各金四錢

△周防洋 定價金貳拾五錢
△珠州岬 定價金貳拾錢
△上縣 定價金貳拾錢
△輪島 定價金參拾七錢

繪畫叢誌

△挿書▽

金谷園遊宴……明人
山水……沈仇
雪中の松……山本春周
同……川合玉堂
秋霽……高橋廣湖
馬上の響……荒井寛方
出陣……島崎柳方
おないとし……鍋島清方
花吹雪……同
落葉時雨……同
雪中松……同
寒林群鴉……岡倉秋景
敵はまぢか……今川玉章
△記事▽
美術界の二傾向……山方香峰
芥子園畫傳蘭譜講義……石川鴻齋
東西兩京の繪畫……寺崎廣業
見飽のする邦畫……竹内栖鳳
日本畫に就て……内田魯庵
低廻趣味と日本畫……桐田生
▲鹽田眞氏の圖案談▲美術學校の改築▲博物館の新列品
▲日本畫の新團體▲故フエノロサ氏法會▲フエノロサ

第二百六十號
定價金參拾錢
郵税金一錢

東通 京新 神石 區町 東陽堂 振替口座一

新撰東京名所

第六十二編

深川區之部

其一

大日本名所圖會

第六十三編

東陽堂發行

●新撰東京名所 第六十二編

●深川區の部 其一目次

●説

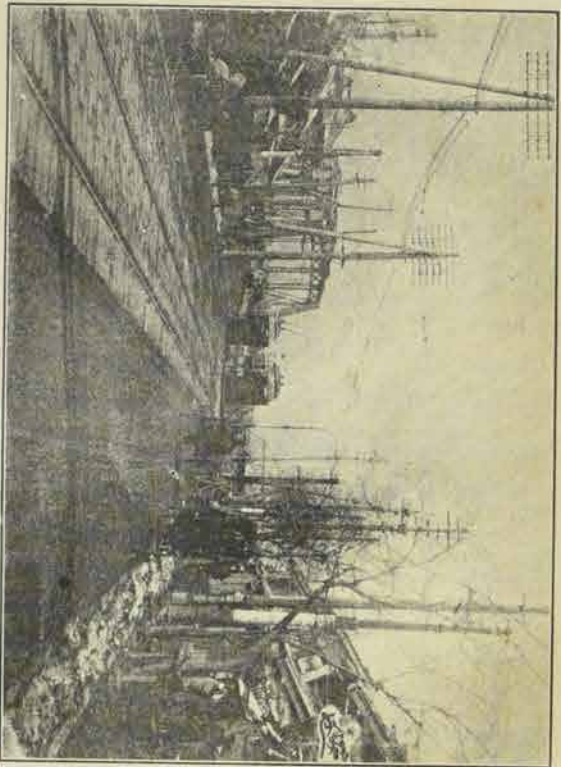
●深川の名義

- 深川の舊城
- 深川には昔より貨車多し
- 永代橋 拓者深川氏
- 汽船發着所
- 永代橋直線通過の景況
- 深川橋
- 仙臺神社、乳鶴屋商店、東京米問屋市場
- 中之堀、中之橋
- 油堀、下之橋
- 深川相川町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川院井町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川十三町
- 深川十三町の賦役
- 深川諸町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川島市場
- 深川富吉町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 正徳寺
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川小松町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川倉庫株式會社
- 東京倉庫株式會社
- 深川松實町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川堀川町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 千島橋、元木橋
- 深川中川町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 田中橋
- 深川富田町
- 位置及區域、町名の起原並沿革

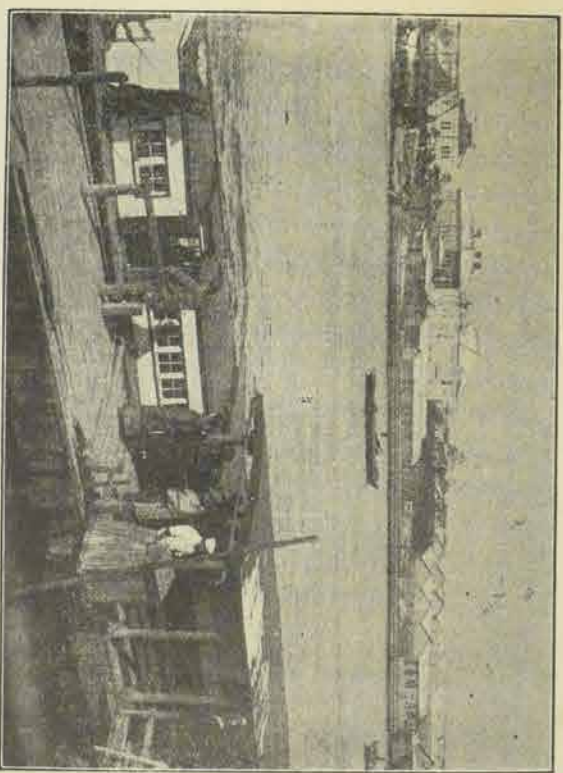
- 深川今川町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川西水代町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川東永代町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川永福町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 用達中兵衛
- 相生橋
- 深川大住町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川村木町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 元木町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川一色町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 吉成納荷神社、○富岡橋
- 深川伊豆町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川松村町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川福住町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川倉庫町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川中島町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 萬徳寺、因達寺
- 深川大島町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川大島町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川給町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 阿彌陀社、出世納荷社
- 深川江崎町
- 位置及區域、町名の起原並沿革、里俗の稱
- 深川江崎町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川公園
- 深川公園
- 二軒茶屋
- 富岡門前仲町

- 位置及區域、町名の起原並沿革、里俗の稱
- 深川寺
- 西念寺
- 紀文晩年の居住地
- 和理店外屋
- 井田神社の繁昌
- 深川前白本町
- 富岡門前白本町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 富岡門前町
- 位置及區域、町名の起原並沿革、里俗の稱
- 富岡門前東仲町
- 位置及區域、町名の起原並沿革、里俗の稱
- 深川繁栄町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川三十三間堂
- 深川三十三間堂
- 深川主役久右衛門
- 深川富平町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川細町
- 位置及區域、町名の起原並沿革
- 深川の上名所、真釣の場
- 深川
- 永代橋東詰
- 富岡八幡宮○永代寺開山○三十三間堂(以上江戸名所圖會所載秘色)
- 富岡
- 永代橋汽船發着光景 永代橋より出口を望む 永代橋東詰
- 佐賀町○仙臺神社○中堀○油堀○三井銀行深川支店○東京倉庫株式會社○三芳銀行深川支店○佐賀神社○萬徳寺○因達寺○萬徳院内弘法大師○萬徳倉庫株式會社○深川倉庫株式會社○深川名物馬場のもきま○富岡門前町○深川八幡神社○深川公園

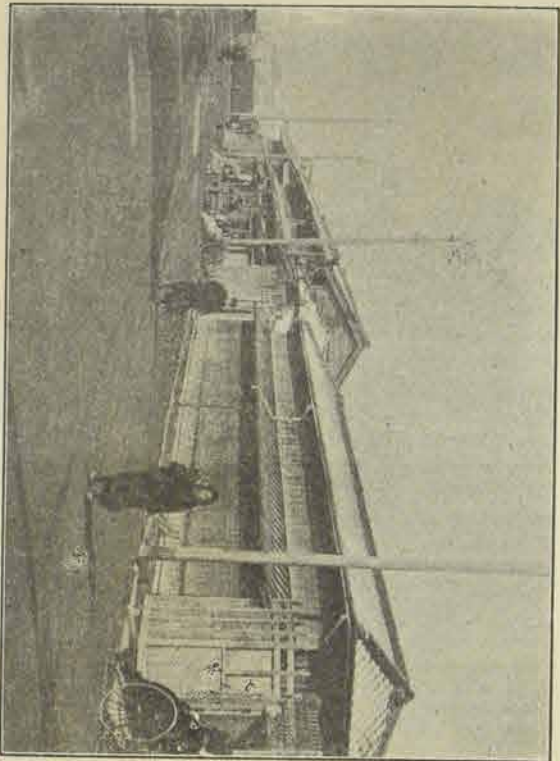




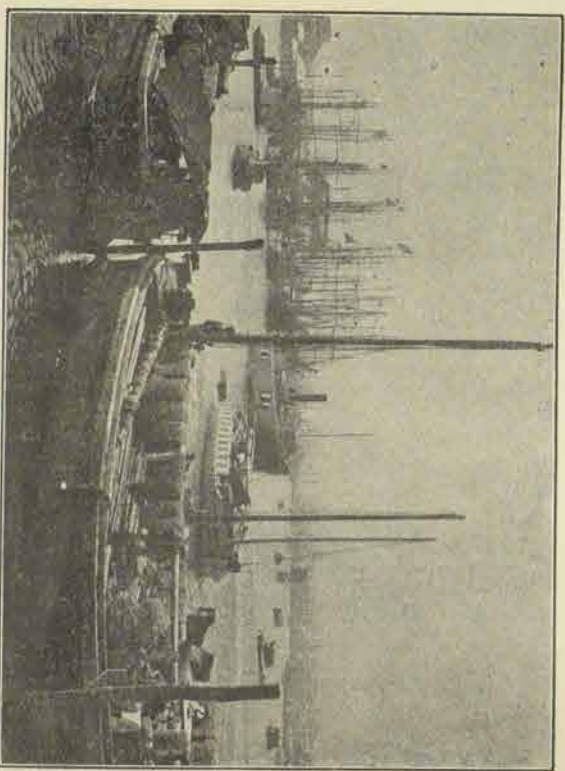
詰 東 橋 代 永



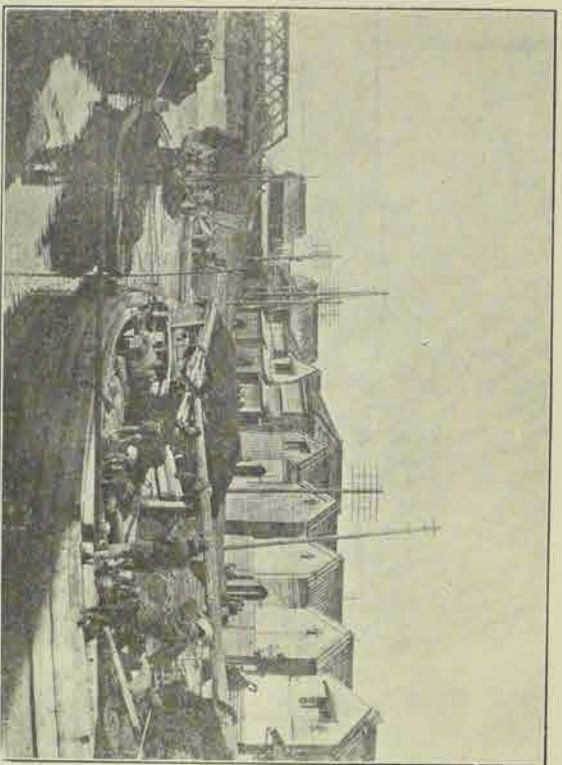
景 光 ノ 着 發 船 深 際 橋 代 永



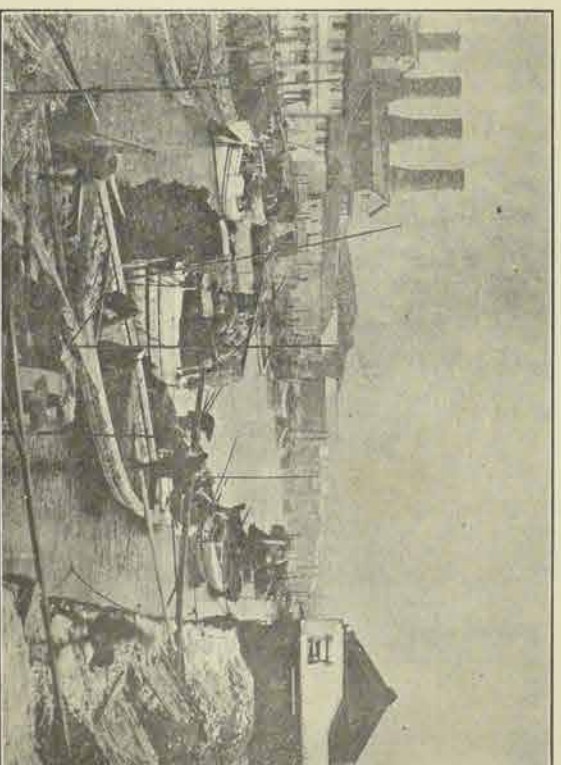
町 賀 佐



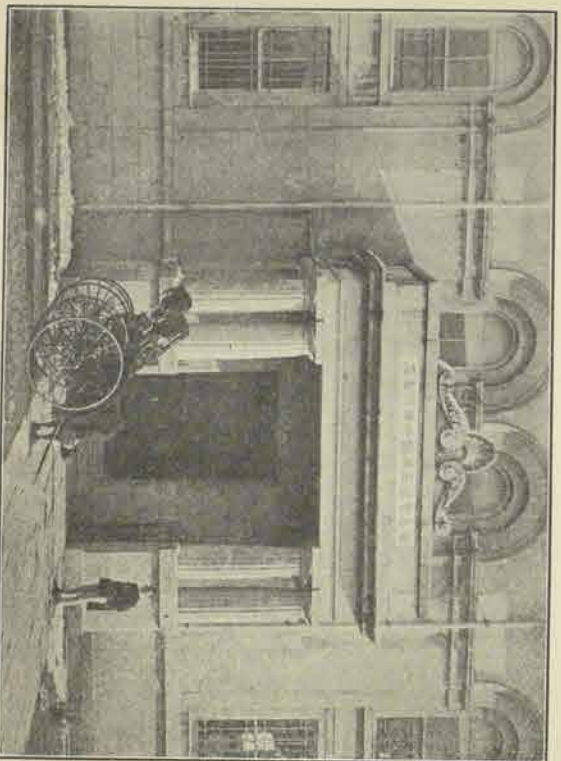
ム 望 フ ロ 川 リ ヲ 橋 代 永



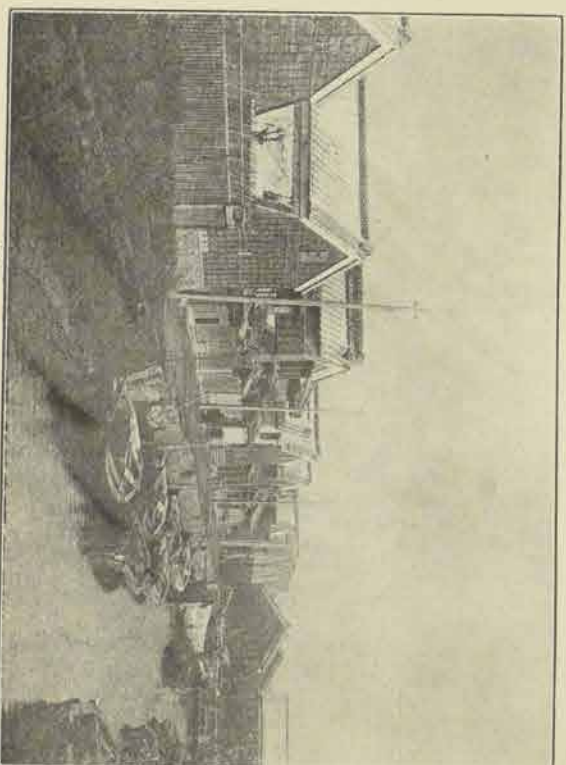
堀
油



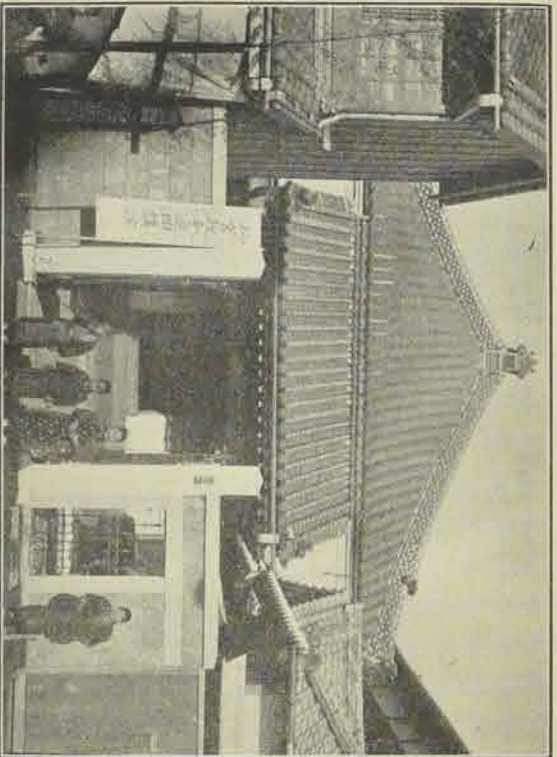
堀
臺
仙



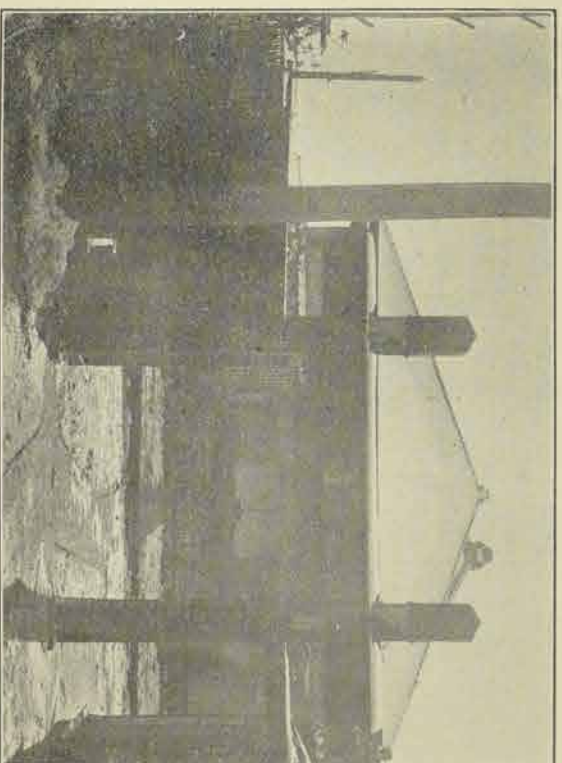
店
支
川
深
行
銀
井
三



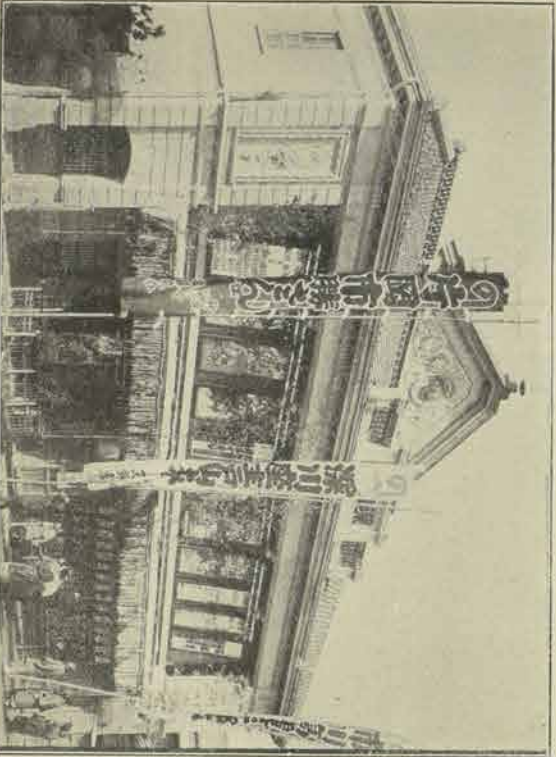
堀
中



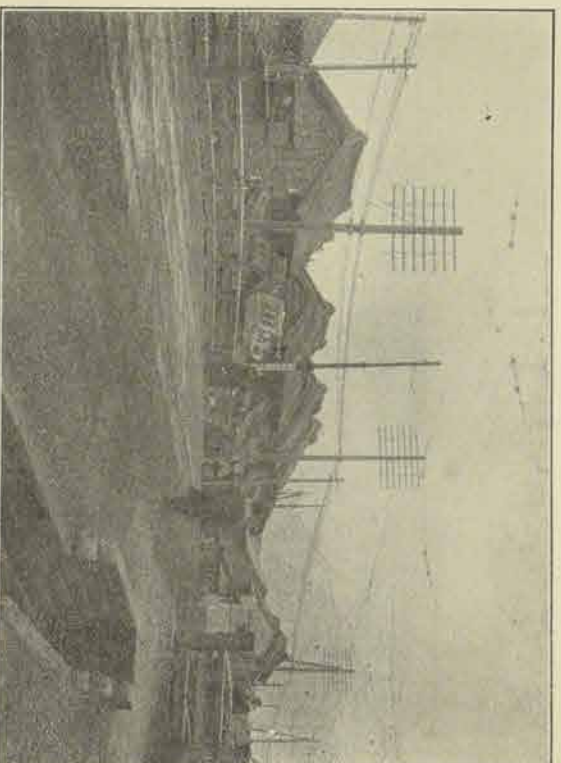
寺 念 西



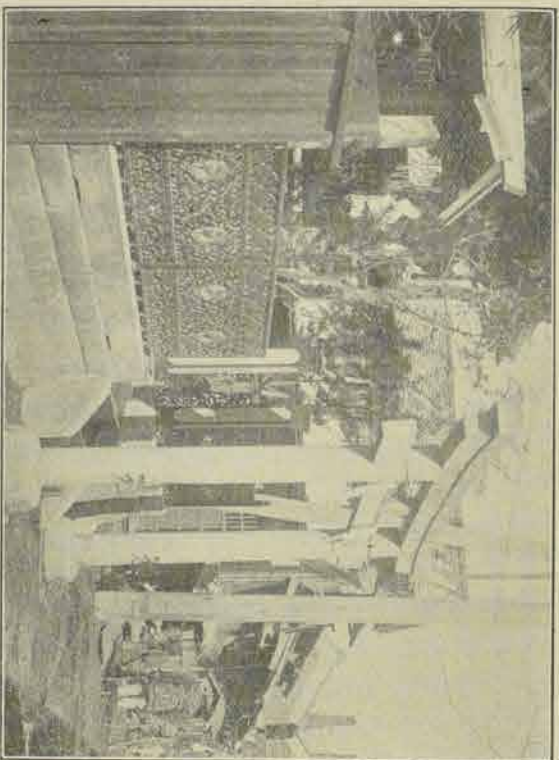
寺 源 正 町 吉 富



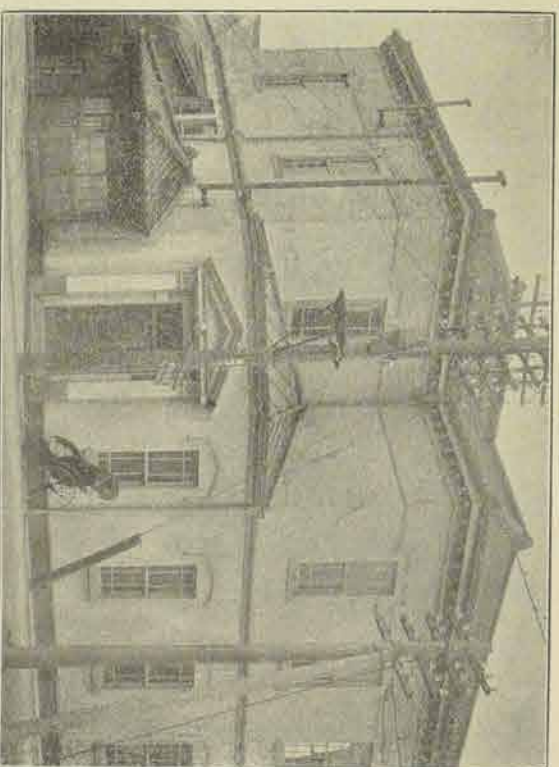
座 川 深



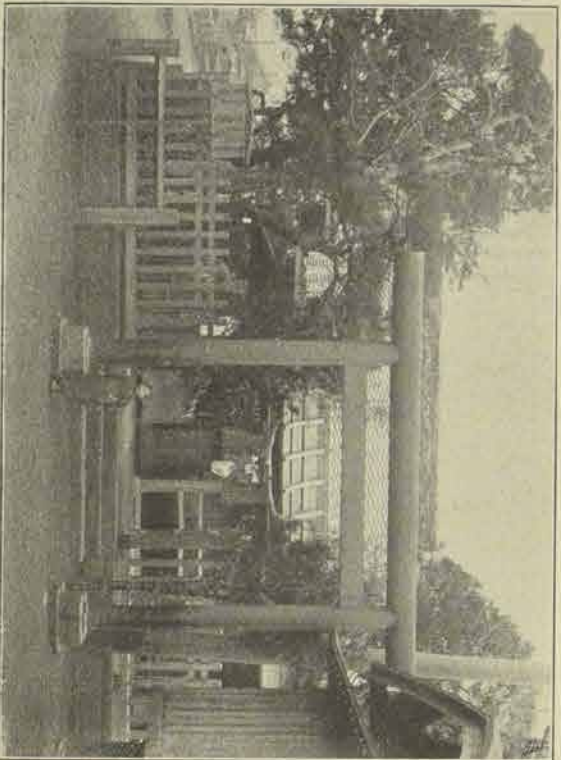
橋 島 福



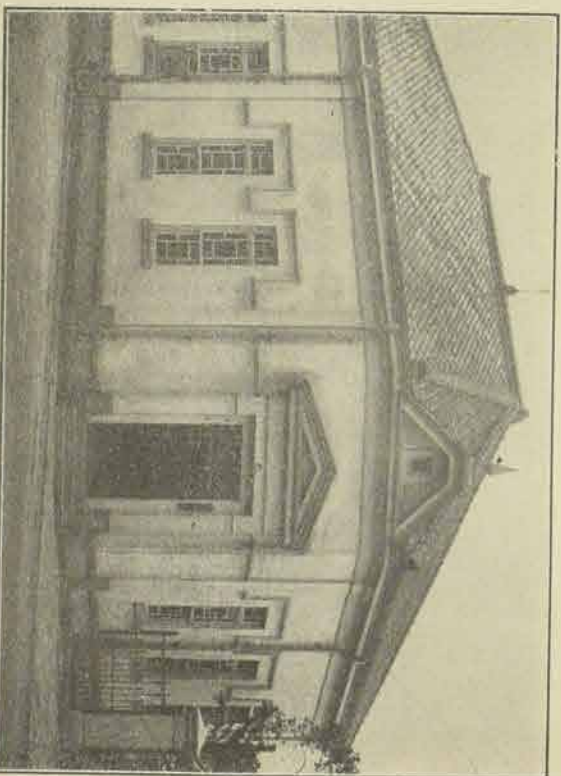
佐賀神社



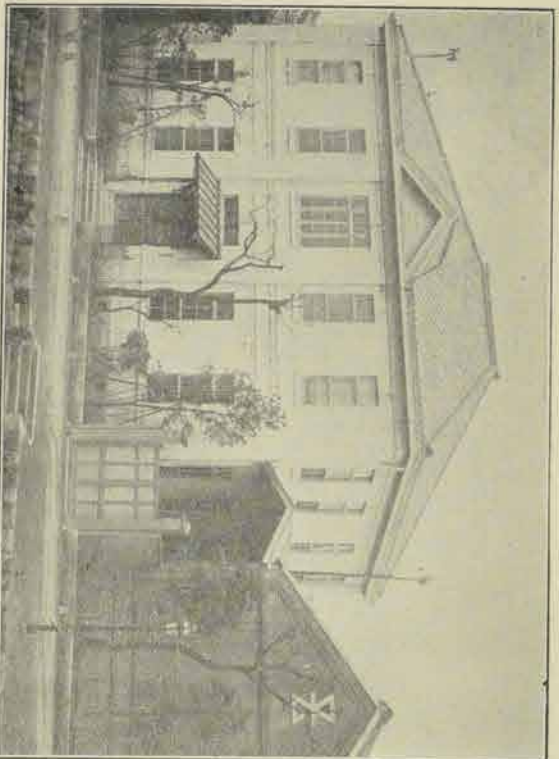
東京倉庫株式會社



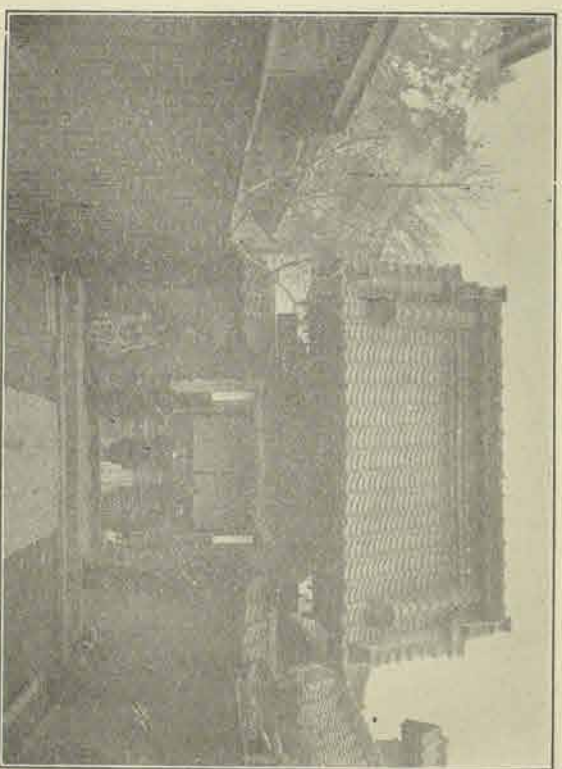
美穂神社



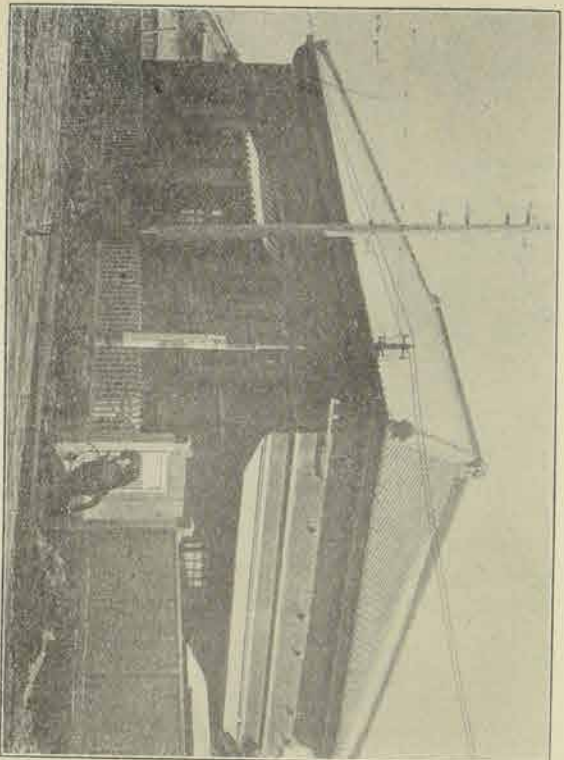
三井銀行深川支店



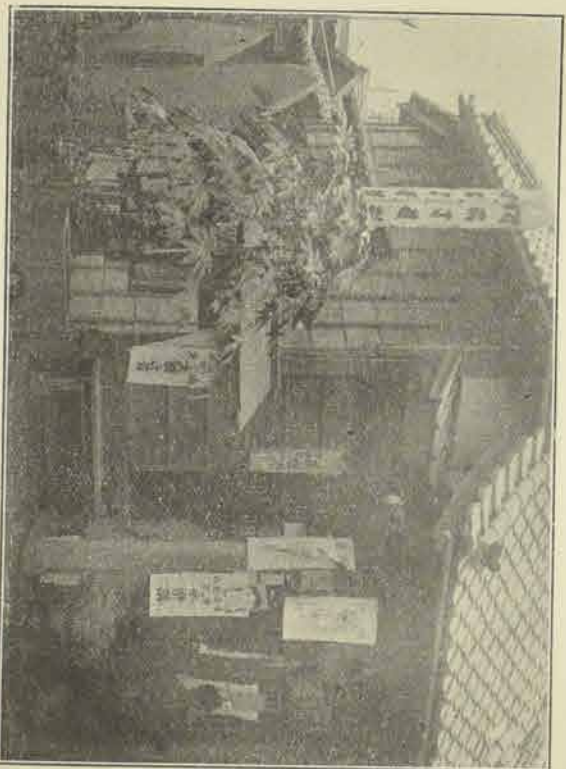
澤倉庫部



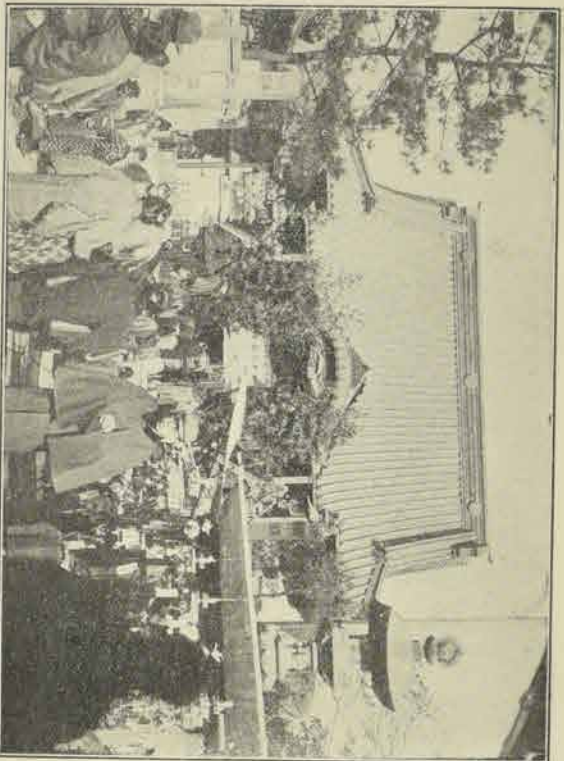
因速寺



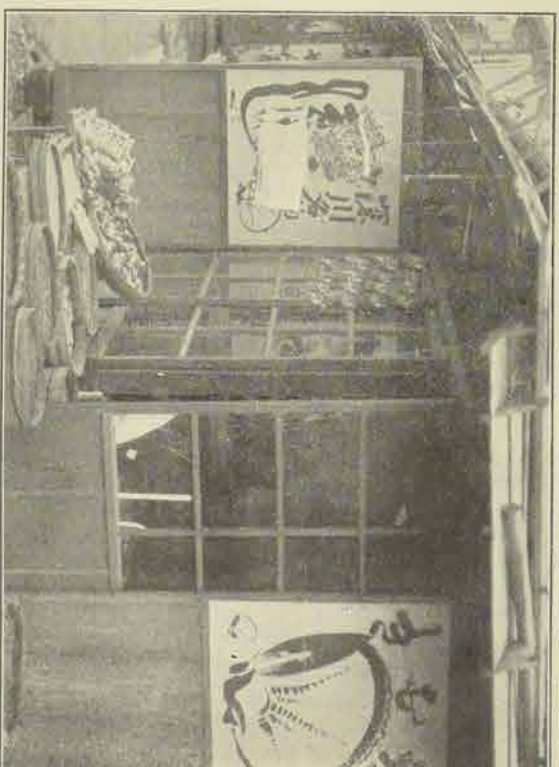
商業倉庫株式會社



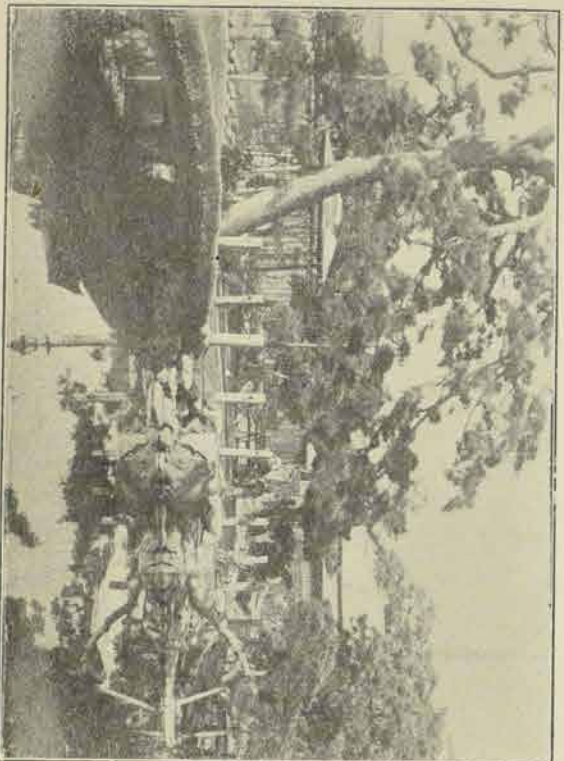
萬德內弘法大師



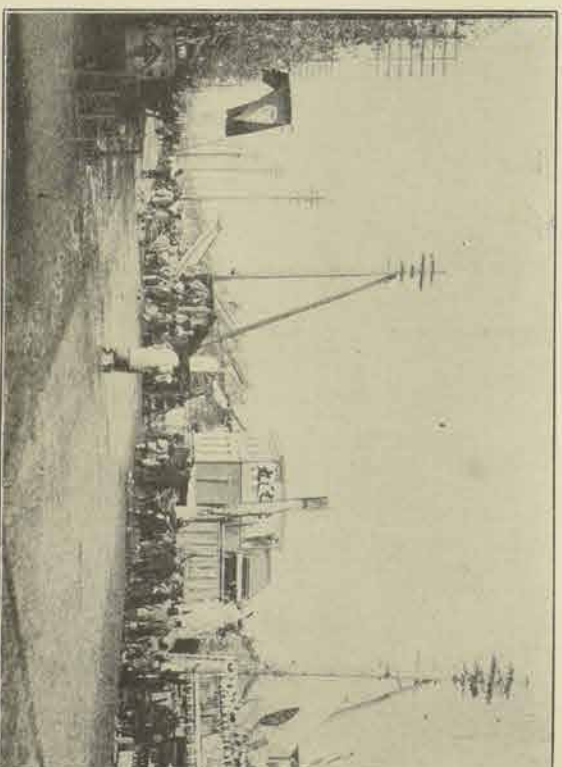
社 神 幡 入 川 深



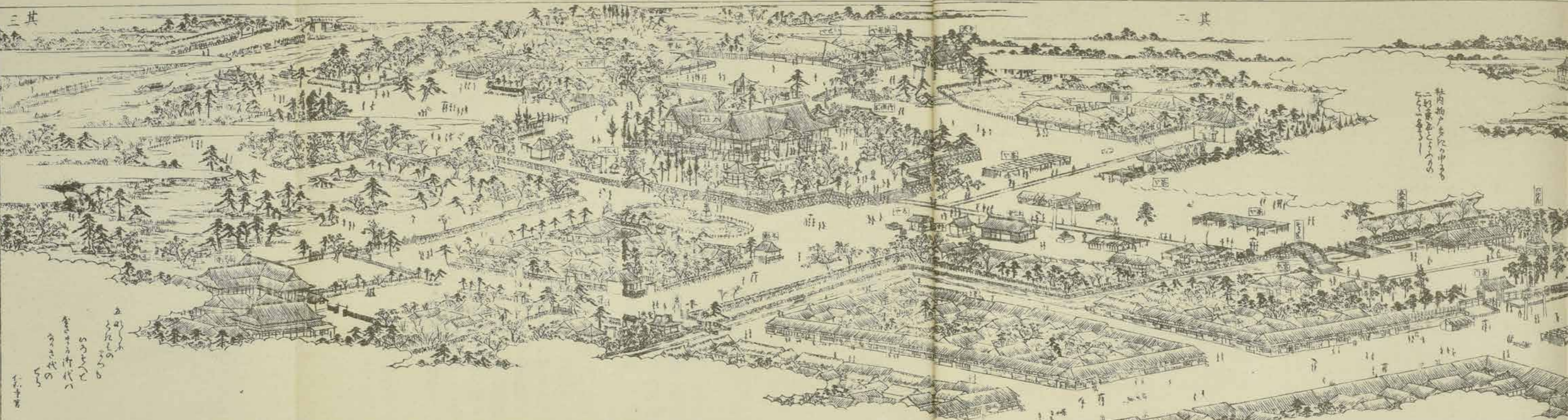
み さ む の 鹿 馬 物 名 川 深



園 公 川 深

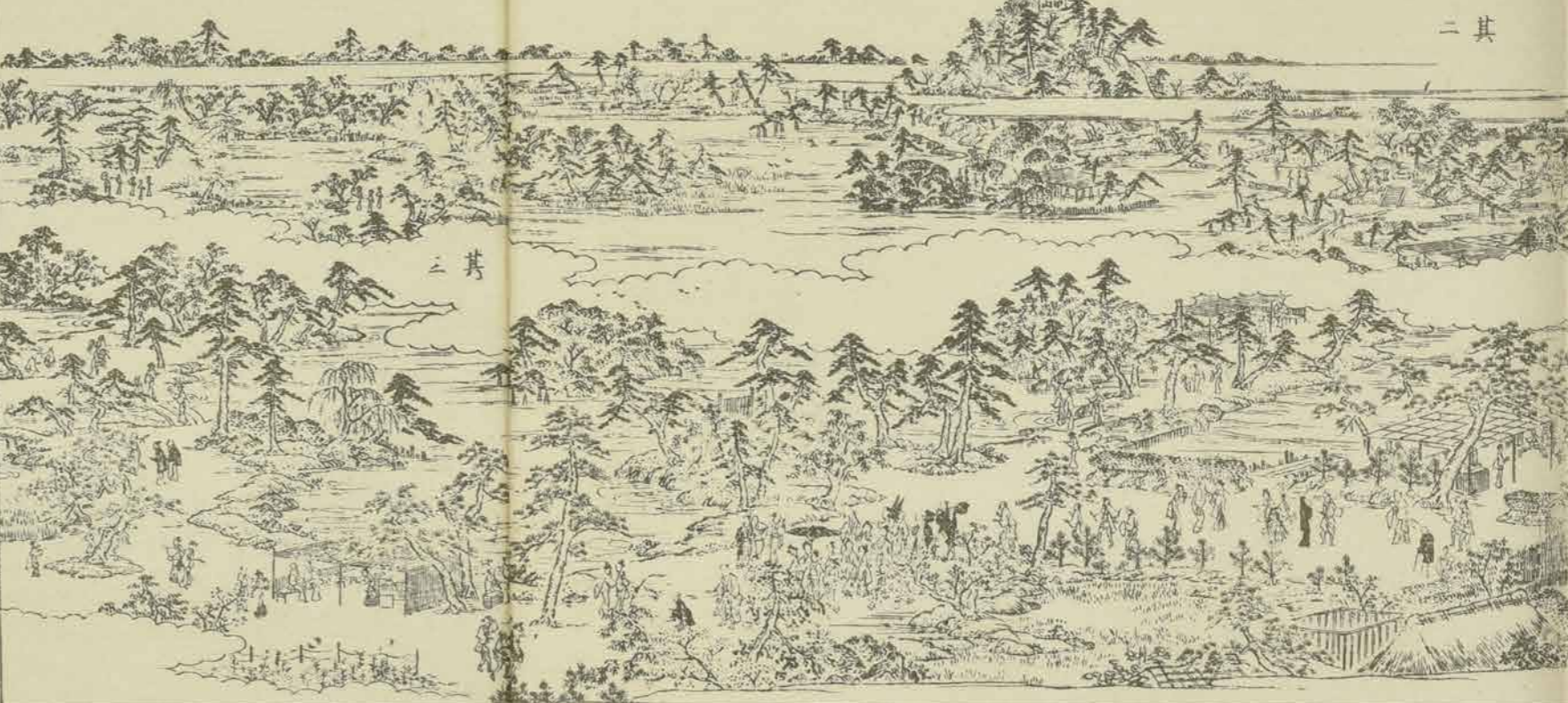


町 前 門 岡 富



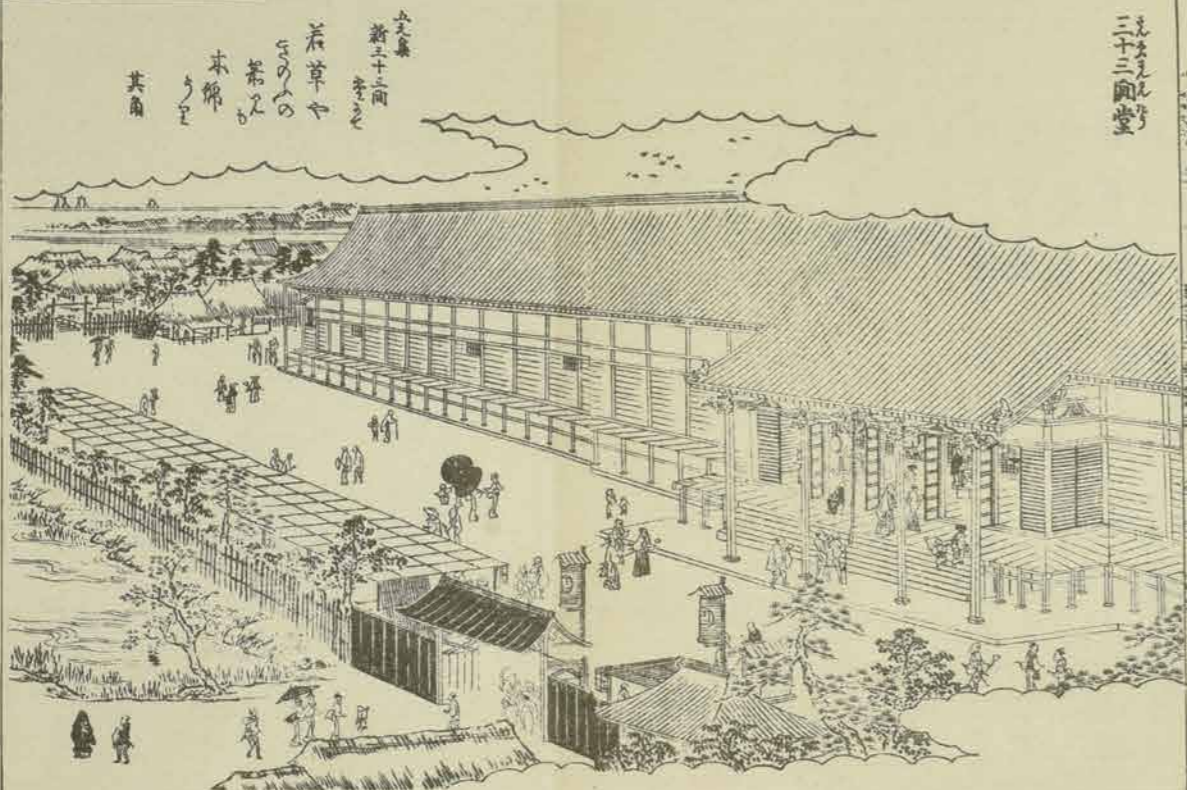
社内物々多岐の中
 二の宮と云ふ所の
 ことなるなり

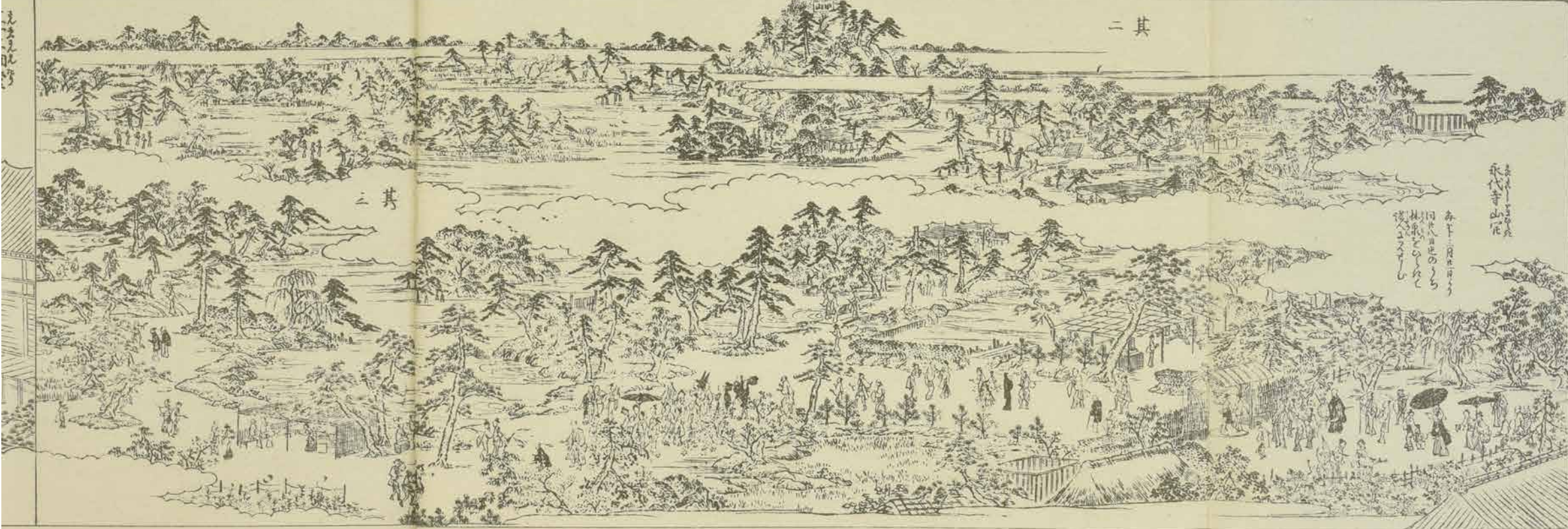
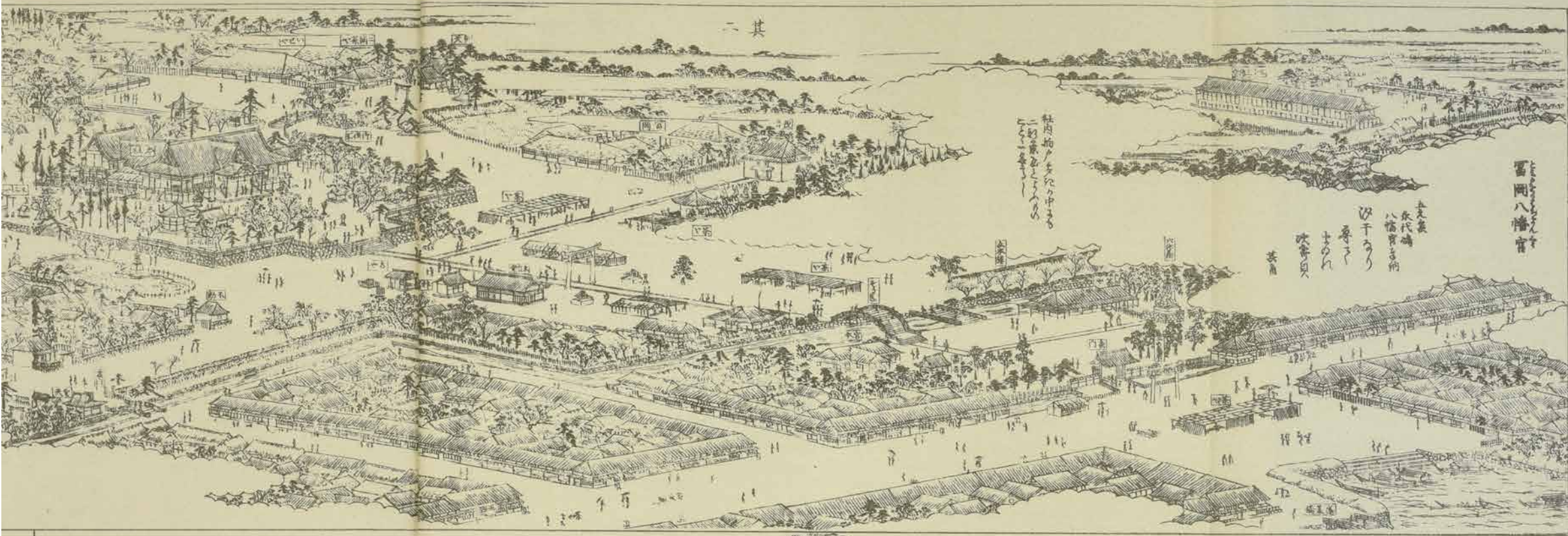
五の宮
 五の宮の
 五の宮の
 五の宮の
 五の宮の
 五の宮の



三十三間堂

五の宮
 五の宮
 五の宮
 五の宮
 五の宮
 五の宮





大日本名所圖會第六十三號

○新撰東京名所第六十二編

深川區の部 其一

●總說

深川區は。宮城の東に在りて。市の東南端に位し。本所區と相並びて所謂江東の地なり。

極東は深川海邊町、極西は深川熊井町にて其の間二十六丁。極南は深川越中島町、極北は深川御船藏前町にて其の間二十七町あり。其の地東方は砂村、大島村に達し。西は大川に界し。南方は總て東京灣に瀕し。北方は本所區に隣れり。地勢は一般に卑低にして大地標高約一米突五に過ぎず。

當區往昔は斥鹵洲渚にして。漸次堆積修築したるものに係る寛永六年村名を立るも所謂獵師町にて漁業者の一部落たり。明暦の大火後移住者あり。元祿に至りて江戸市に屬せり。蓋し其の初深川村と稱したるは。西南なる佐賀町、蛤町等の一帶に限れり。東には永代島、新田島あり。東南には洲崎島あり。後ち相合して深川に入れり。明治維新後赤洲崎の地を埋立たり。當區は市内第一の水郷にして。橋梁の多きこと亦市内第一位に在り。即ち公園橋十四市郡聯帶橋四、市橋五十六、私橋六十六合計百四十橋を有せり。

區内には米穀の倉庫縱横の入堀に臨みて。多く相連接し。又木場と稱する貯木場等ありて。他區と全く其の觀を異にせり。深川は實に東京全市の倉廩なりといふべし。

今回改正の戸口調査に據れば。當區の世帯數は二萬八千四百六十二にして。人口は十二萬〇二百二十二人とす。現今區内の町數は九十八にして。其の名稱は左の如し。

深川佐賀町一丁目	同 大島町
二丁目	同 蛤町二丁目
同 相川町	同 二丁目
同 熊井町	同 黒江町
同 諸町	同 富岡門前仲町
同 富吉町	同 山本町
同 小松町	同 富岡門前町
同 松賀町	同 東仲町
同 堀川町	深川數矢町
同 中川町	同 平富町一丁目
同 富田町	同 二丁目
同 今川町	同 佃町
同 西永代町	同 牡丹町
同 東永代町	同 越中島町
同 永堀町	同 古石場町
同 大佳町	同 富久町一丁目
同 材木町	二丁目
同 一色町	同 洲崎町
同 伊澤町	同 入船町
同 松村町	同 島田町
同 福住町	同 木場町
同 中島町	同 茂森町

同 扇町
同 鶴歩町
同 大和町
同 龜久町
同 冬木町
同 和倉町
同 龜住町
同 萬年町二丁目
同 二丁目
同 清住町
同 伊勢崎町
同 西平野町
同 東平野町
同 山本町
同 靈岸町
同 吉永町
同 久永町
同 島崎町
同 三好町
同 西永町
同 元加賀町
同 扇橋町二丁目
同 二丁目
同 東大工町
同 仲大工町

同 裏大工町
同 西大工町
同 西元町
同 八名川町
同 安宅町
同 御船藏前町
同 西六間堀町
同 東六間堀町
同 常盤町一丁目
同 二丁目
同 西森下町
同 東森下町
同 東元町
同 富川町
同 西町
同 東町
同 猿江町
同 猿江裏町
同 本村町
同 上大島町
同 東扇橋町
同 海邊町
同 千田町
同 石島町
同 豊住町

同 東平井町
同 西平井町
洲崎辨天町一丁目
同 二丁目
河 岸 名
佐賀町河岸(佐賀町地先)
永代河岸(永代橋際)
巽 河 岸(諸町地先)
奥野河岸(富吉町地先)
小松河岸(小松町地先)
松賀町河岸(松賀町地先)
西永代河岸(西永代町地先)
東永代河岸(東永代町地先)
大住河岸(大住町地先)
油堀河岸(龜住町地先)
一色河岸(一色町地先)
伊澤河岸(伊澤町地先)
松村河岸(松村町地先)
福住河岸(福住町北地先)
近江屋河岸(同 西地先)
濱邊河岸(中島町地先)
大島河岸(大島町地先)
門前河岸(富岡町前町地先)
黒江河岸(黒江町地先)

加賀ノ河岸(同)
東門前河岸(富岡町前町地先)
數矢河岸(數矢町地先)
辨天前河岸(平久町地先)
入船河岸(入船町地先)
島田河岸(島田町地先)
中木場河岸(淺森町南地先)
扇町河岸(扇町地先)
大和河岸(大和町地先)
南仙臺堀河岸(冬木町今山町間)
清住河岸(清住町地先)
北仙臺堀河岸(伊勢崎町地先)
久永河岸(久永町地先)
西亥ノ堀河岸(扇橋町地先)
小名木河岸(東大工町地先)
萬年河岸(萬年橋際)
西元河岸(西元町地先)
安宅河岸(安宅町地先)
西六間堀河岸(西六間堀町地先)
東六間堀河岸(東六間堀町地先)
芝衝河岸(高橋際)
南五間堀(東森下町地先)
富川町河岸(富川町地先)
西町河岸(西町地先)
東町河岸(東町地先)

晒 河岸(東町地先)
猿江河岸(猿江橋際)

東亥ノ堀河岸(石島町地先)

◎深川の名義

深川は慶長年間伊勢の人深川八郎右衛門と稱する者。此地を新に開拓したるを以て其の氏を取りて名くといふ。此説は元町の録上書、及び猿江町泉養寺の記録に在り。正説とすべし。新編江戸志には、「むかし鱒河とも書けり。往古は海邊にして。鱒など多くありしにや。舊記も深川の地名はいまだ其據を得ず。八幡宮を富岡と云へるは。鶴岡に對して云へる成べし。又云。深を萬葉に富加と書く。今富が岡といふも富かと云に同じ」とあり。又江戸砂子富岡八幡宮の條にも、「鱒河八幡とも」と記して。フカを鱒とするの説を取るが如しと雖も。是は往古海面なりしより考へ出したるものにて。固より前説を正確とすべきなり。

◎深川の舊域

深川の舊域は東方は十間川に界し。西方は淺草川に浴ひ。南方は海岸に邊し。北方は六間堀森下町、富川町、西町、猿江町、大島町に及べり。即ち今の深川區の境域と大差なし。

◎深川には昔より貸庫多し

府内備考に伊勢貞丈が隨筆を引て云。明曆三年正月十八日十九日の兩日大火の時。深川に在りしかし藏の中に米十萬七千二百三十二俵、大豆一萬八千五百四俵、大麥一萬五千二十俵、

小麥一萬二千俵、下り酒四萬百七十九樽、鹽三萬八千六百八十俵、胡麻三萬九千四百俵、荳胡麻千六百八十俵、水油六千四百二十樽、魚油二萬百七十樽、蕎麥千六百八十俵、燒炭八萬八千三百三俵、薪五十七萬九千九百七束主なしとなれりと。載るによれば。地割なき前にも已に商人の藏など多く建ありしとみゆ。されどそれもややく小屋かけやうの藏なりしなるべし。

◎深川開拓者深川氏

深川の開拓者たる深川氏は。いかゞなりしやといふに。祖先八郎右衛門より町方二十七ヶ町並に村方の名主役を勤務し居りしが。第七世八郎右衛門に至り。組合清住町大達孫兵衛といへる者の家名退轉の際其の跡式取建方に關し。組合一同不念の事あり。因て他衆を助けむが爲めに。責を一人に負ひ。寶曆七年十月七日獄に下り。十一月十一日出獄預けとなり。同三十日病歿す。此を以て家名を立るを得ずして遂に斷絶せり。歴世の墓は猿江泉養寺に在り。而して其の祖先は當地の開拓者たるのみならず。多數の町民を助けむが爲めに斷絶せし者なるを以て。町民は深く之を嘆し。二十七ヶ町協議し。年々資金を醸出して追善等を爲せしといふ。

◎永代橋

永代橋は大川に架したる長橋にして大川の最南に在り。深川相川町より京橋區大川端町に連絡す。元祿九年丙子の工事着手にて。越て十一年戊寅落成し。八月

朔日より往來を許せり。長百間餘、幅三間一尺五寸。もと此處船を以て往來し。深川大渡と呼べり。享保四年新大橋を存して。本橋を撤すべしとの議ありしが。深川の市民請ふて存することせり。

當時橋高くして西の富士の白雪を望み。北に筑波の双翠を眺め。南に箱根の連山東に房總の諸峰を觀。風景の佳なる江戸第一と稱せられたり。現在のものは。明治三十五年の架設にして鐵橋なり。長百間二合幅七間八合あり。

往時八幡宮の祭禮に當り。本橋の墜落せしは。有名なる慘事にして世に喧傳する所なり。此事は京橋區の條に詳記したれども。今本橋の事を述るに際しては亦缺くべからず。因て武江年表に就き。其の大要を掲ぐ。

八月十五日深川八幡宮祭禮（隔年に渡しけるが十二年前より喧嘩にて休みたりしに。今年久しぶり出て出る産子の町々歳事記に有一雨天にて十九日に延る。同日産子の町々より踊り遊物等を出す。江戸中はいふに及ばず近在より見物出て。晝四時靈岸島の出しねり物永代橋の東詰まで來りし時。橋上の往來駢闐群集の頃真中より深川の方へよりたる所。三間計を踏崩したり。次第に崩れて跡より來るものもいかにとす事ならず。いやが上に重りて落かゝり水に溺る。助りしは稀にして川下の水屑となりしは凡千五百人餘といふ。此噂たちまち江戸中へ聞へて。見物に出たる家族の苦心大方ならず。新大橋は通路止りて兩國橋を渡り迎ひに出るもの晝夜引も切らず。官府より厚く令せられて水中死骸を引揚しめ。男女老

少を分ちて大路に積置けるを。家族尋ね來りてなくく野邊送りなす。愁傷のさす目もあてられぬ事ともなりしとぞ（溺死の家族貧なるは御救の物給はりたり。此時の顛末夢の浮橋といへる草紙に。委しく記せりとす）

汽船發着所

永代橋東北詰に。隅田川汽船會社の汽船發着所あり。此處を起點として。新大橋に寄航し本所區に入りて吾妻橋に達す。二錢均一にて。通行税共に三錢なり。往復は五錢とす。

永代橋直線大通の景況

永代橋直線の大通りは相川町、佐賀町、諸町、富士町、にて即ち富岡八幡神社並に成田山不動堂に參詣する要路にして。且電車汽船に便なるを以て。其の繁昌他町に冠たり。殊に一日十五日二十八日は不動尊の緣日にして最も雜沓を極む。此處にはいかなる商家あるや試みに永代橋より福島橋に至る間の營業者を點檢したるに左の如し。

左側

内外米雜穀商齋藤賣場。丸六商店。川越屋吳服店。東洋木材株式會社。名子屋小間物店。立岡煙草店。上田屋下駄店。秋山。齋藤行李店。遠藤金庫店。株式會社二十銀行深川支店。布袋屋唐物店。辯護士徳岡梅吉。旅館榮代館。小川帽子店。箆筒指物和田商店。寄席廣川亭。井上藥舖。

右側

神佛師野村光山。福田弘益堂。信濃物産商會。牛肉店惠比

壽。菓子司壽美家。下總屋下駄店。蕎麥屋今村。すし兼。船橋屋菓子店。幸手屋紙店。葬儀社北辰舎。洋燈商磯村商店。

深川佐賀町

◎位置及區域

深川佐賀町は。大川即ち隅田川の東畔に在る市街にして。區劃して二丁となす。其の東は小松町と松賀町及び堀川町、中川町、今川町に對し。西は永代河岸、佐賀町河岸を隔て、隅田川に臨み。南は富士町の一部と相川町に接し。北は仙臺堀に限れり。土地の番號は左の如し。

一丁目 一より四十八に至る。其中二十二を缺けり。
二丁目 三より五十七に至る。

◎町名の起原並沿革

佐賀町は。寛永六年藤左衛門、次郎兵衛の二人當時の代官伊奈半十郎に請ひ。自ら填築して家屋を建設したる處にして。漁者多きを以て之を獵師町と稱したり。即ち深川獵師町八區の一なり。其の後二人の名を以て町名とし。上の橋の方を次郎兵衛町。中の橋より南方を藤左衛門町と唱ふ。寛文十年伊奈半十郎檢踏して年貢地とす。元祿八年六月四日酒井河内守安藤對馬守再び檢踏して。高四十六石九斗七升二合段別三町五畝三十三歩と定む。其の際當町の形肥前國佐賀の姿に似たりといふを以て今の町名に改め。正徳三年に至り。始て町奉行の支配に屬せり當町はもと里俗に上之橋際より中之橋までを上佐賀町。中之橋際より下之橋までを中佐賀町。下之橋よ

り南木戸際迄を下佐賀町と唱へたり。今の一丁目は即ち上、中の兩町。二丁目は下の一町なりしを。明治四年十二月改定したるものなり。

里俗に中之橋川筋を中之堀。下之橋左右川岸通りを油堀と唱へ。又舊中佐賀町中央横町を稻荷小路と唱ふ。佐賀稻荷あるに因るなり。中之橋南川岸通り東方を八戸前と唱ふ。土藏八戸前あるに基く。

開拓者藤左衛門、次郎兵衛の二人當町の名主役を勤務し居りしが。其の後次郎兵衛は免せられ。藤左衛門一人の支配となり。子孫繼續したるに。文化年間罪ありて其の家絶たり。

◎景況

當町は大川端に沿へる市街にして。商家は大抵肥料雜穀等の問屋賣場等にて。細買なし。今記者の點檢したる一二丁目河岸通りを記せば左の如し。

肥料販賣店新谷三五郎商店、大塚、金子、長江商會、賣場神忠治、村崎肥料販賣所、川宮商會（内外米雜穀）米雜穀委託賣買山河南商店、角山倉庫、熊谷商店、大澤、榎本、鈴鹿、井口、野間鹽賣場、外國米海老原賣場、海陸物産肥料屋野商店、輸入米穀肥料峰岸商店、肥料賣場岩崎支店等あり。其の他三井銀行深川支店（一ノ三三）東京白米商同業組合（二ノ三四、三十二年九月創立）東京廻米問屋組合（二ノ五五、十八年十二月創立）東京米穀貿易商組合（三十八年十二月創立）東京蒸氣精米業組合（二ノ三四、三十三年十一月創立）等あり。

●佐賀神社

佐賀神社は。佐賀町一丁目三十六番地に在り。もと佐賀稻荷と稱したるものなり。軒頭に「佐賀神社」と題する大提灯を吊す。社殿大ならずと雖も美を盡せり。柱上の唐獅子、欄間昇龍の彫刻など觀るべし。社前に石の鳥居を建つ。その左側に新築の神樂殿あり。

●乳熊屋商店

乳熊屋商店は佐賀町二丁目に在り。店主は竹口作兵衛氏なり。元祿の初年其の祖先勢州乳熊より出で。現地に味噌の醸造業を開始したる以來連綿今日に至る。一ヶ年醸造高は三十萬貫に達す。

元祿十五年赤穂浪士永代橋を過ぎし際。大高子葉其の棟木に染筆せしが。惜哉明治十九年火災に罹りて其の名蹟を失ひたり。

●東京廻米問屋市場

東京廻米問屋市場は佐賀町二丁目に在り。東京案内に云。明治十九年十二月の創設に係る。徳川時代に在りて。江戸の人口は今の東京と大差なく。約二百萬を有し。之に對する米の供給は。江戸附近即ち關東地廻りの米のみにて足るべきにあらず。而も其頃は幕府を初め。諸大名各其領國より貢米を江戸に輸送し家臣等の食祿に給與し。兼て餘米を賣拂ひて諸般の用度に宛て。之が爲め商人の手に依りて他國より廻米したる

る量は甚だ少なりき。當時この廻米問屋を下り米問屋と稱し。今の廻米問屋の前身とも見るべきものなり。然るに維新廢藩の後に至り。幕府は素より諸藩の廻米全く跡を絶ちたるのみならず。政府亦米納を廢して。貢租は之を金納となしたるより。斯に米の廻送を業とする者を生じ。地方の米を買收し來り。又地方荷主の委託を促し。之を集めて東京市中に供給す。これ即ち東京廻米問屋にして。維新以前のより米問屋に比すれば。其規模の大なる到底比較すべき限りにあらず。現今問屋組合員は三十九名。中村清藏を總行司とし。三十九年度の賣行高二百八十九萬七千七百七十五俵に達す。因みに江戸會誌に載る米穀入津高を掲げて參考に供すべし。

米穀入津高在米高

凡米穀は民生日用物の第一に居るものなれば。經濟の任に當るものは常に其豐耗を知らざるべからず。故に府下米價の高下と入津の石數とを書上することは早く寛文の令に著はれたり。余曾て其舊簿數十冊を検したれど。皆斷條零篇のみにて全數を統計したるは未だ見當らず。其の内に就て一二參考となるべきものを摘出すれば左の如し。

- 享保十二年米穀入津高
- 一米百二十五萬六千四百五十三俵 江戸回船問屋着高
- 一米百二十七萬七千五百八十八俵 浦賀にて改高
- 同 上
- 此石數五十一萬四千五百八十一石九斗
- 内 武家米五十八萬五千六百四十二俵直著の分

右は江戸米穀問屋と浦賀番所と兩所にて調べたるものなれど。浦賀を経て問屋へ著荷することゆへ。其實は同一貨物なり。但武家米の直著といふは。諸家の廻米にて各邸へ直に積入るゝものなり。

文久二年より元治元年まで。三ヶ年を平均したる諸米商の取扱ひし俵高

一米二百十六萬六千八百六十五俵餘

此石數は詳ならねど三斗五升入と見積りて計算すれば凡七十五萬八千四百二十石餘なるべし。

以上二項は粗其統計を見るべきものなり。されど是を以て府下百數十萬の人民を養ふには足らざるゆへ。未だその全數なりとは認めがたし。其後又一紙を得しは左の如くなり弘化二年より嘉永元年まで。四ヶ年の入津米を平均して一ヶ年の石高

一米百四十二萬七千六百九十一石五斗一升七合餘

此石高は元治の數に比するに實にその二倍なり。是或は其全數を得るに近かるべし。但武家米は此内。幕府の官米は此外なるべき歟。

又舊時武家米商米の在高は左の如し。但町會所の分は此外なり。

- 嘉永二年四月。在米高
- 一米四十五萬八千七百二十四石 武家米
- 一米三十萬五千八百十六石餘 商米
- 同 三年 月同上
- 一米五十七萬九千俵 武家米

一米七萬五千五百俵

商米

右兩年の在High甚だ多少不同なれど其故は詳ならず。曾て聞く米穀を取扱ふものゝ古より見積りといふは。凡府内には常に二百二十萬俵の在米あり。此石數は大抵七十六萬石餘なるべし。此内四十三萬石餘は武家米にて三十三萬石餘は商米なりと。此説は前の嘉永二年の石數に符合せり。猶消費米の考あれど繁文ゆへ次號に譲る。

因みに近時の入津高を附記す

- 明治十五年前年十月より本年九月迄 入津高
 - 一米百十六萬五千九百九十九石五斗七升七合餘
 - 同 十六年同上
 - 一米百十八萬九千二百八十二石二斗九升三合餘
 - 同 十七年同上
 - 一米百二十一萬九千三百三十四石七斗三升一合餘
- 其後逐年に入津高増加し去る二十年の頃は百七十萬石に及ぶと聞及べど。詳細の調は未だ得ざるゆへ略す。

●仙臺堀

仙臺堀は。小名木川の南位に在りて。大川の入堀なり。佐賀町一丁目と清住町の間より起りて。東に延び南葛飾郡の界に達す。幕府時代上之橋の北に松平陸奥守の藏屋敷ありしに因り里俗に仙臺堀と呼び來れるなり。

此堀は元祿十二年四月開鑿せしものにして。普請奉行深津八郎右衛門其の工事を董督せり。

●上之橋

上之橋は。仙臺堀の入口に架し。佐賀町一丁目より清住町への道路を連絡す。木製にして。長さ二十間幅三間あり。明治三十一年十二月換架せしものに係る。此橋は大川の中洲に對し。景色甚だ佳なり。

●中之堀

中之堀は。佐賀町一丁目と二丁目との間に在る入堀にて。少しく延て曲折して東永代町に至り。南北に横はり。仙臺堀と油堀に合す。即ち兩堀の中間に在るを以て名く。開鑿の年次は詳かならざれども。相傳へて寛永六年なりといふ。其の後元祿十二年に至り。深津八郎右衛門之を堀り廣げたるよし。(後にも記事参看すべし)

●中之橋

中之橋は。中之堀に架し。佐賀町一丁目の通路に便す。木造にして長さ五間幅三間あり。明治三十五年七月の換架に係る

●油堀

油堀は。中之堀の南位に在り。大川の入堀にして。東に延びて木場町に達す。昔時松賀町に油商人會所あり。油荷の漕運頻繁なるを以て名く。開鑿等總て中之堀に同じ。

●下之橋

下之橋は。油堀に架し。佐賀町一丁目と同二丁目を連絡す木

至り。其の氏を取りて熊井町と改む。同十五年十一月始て町並屋敷となり。正徳三年五月市街に列せり。町内にもと相川町の飛地ありて。里俗に半町と呼べり。明治二年十二月割て諸町に併合せり。里俗本町を濱通りと唱ふ。又北方相川町向合せの處を「カキ店」と呼ぶ。蠟を商ふ者居住せしに因る。

●舊獵師町の賦役

舊獵師町は開拓後第二年即ち寛永七年より一ヶ月三回「キス」「セイゴ」等の魚類を獻じ。臨時に蝦、蛤の供用を爲し。將軍川筋に御成の際は。其の携帶器具の漕運を務む。魚類の上納は。寛政四年三月町入用減少の際之を廢止し。年々錢六拾六貫七百文を上納することとせり。但毎年七月十五日生活せる手長海老百尾を納進し。器具の漕運は舊に仍りて勤務せり。舊獵師町は左の如し。

- 熊井町(舊理左衛門町) 佐賀町(舊藤左衛門町、次兵衛町)
- 相川町(舊新兵衛町) 清住町(舊彌兵衛町)
- 諸町(舊彦左衛門町) 大島町
- 富吉町(舊助十郎町) 黒江町(舊助左衛門町)

●濱十三町

深川に於て漁業家の居住せる處を昔時濱十三町と唱へたり。町名左の如し。

- 大島町 中島町 熊井町 奥川町
- 黒江町分 黒江町 蛤町分 横店一丁目二丁目
- 東黒江町 蛤町分 上二丁目

造にして。長さ十一間幅三間あり。明治三十八年七月の換架に係る。

●深川相川町

◎位置及區域

深川相川町は。隅田川の東畔に位せる小市街にして。其の東は富吉町に連り。西は隅田川に枕み。南は熊井町に面じ。北は佐賀町二丁目に接せり。土地の番號は一より十七に至る。其の中十一番地を缺けり。當町内を電車線路通過す。

◎町名の起原並沿革

深川相川町は。舊獵師町八區の一にして。寛永六年相川新兵衛の開築したる所なるを以て。初め新兵衛町と稱せしが。元祿八年に至り。他と同じく其の氏を取りて今の町名に改む。是より先き寛文十年貢地となり。是年當町の高を十三石三斗五升四合段別一町一反一畝八歩と定めらる。正徳三年市街に列す。里俗に當町を蠟店又は「エサバ」と唱ふ。

●深川熊井町

◎位置及區域

深川熊井町は。大川の東岸に在る一市街にして。其の東は富吉町に連り。西は大川に枕み。南は諸町に接し。北は相川町に隣れり。土地の番號は一より十六に至る。

◎町名の起原並沿革

深川熊井町は。獵師町八區の一にして。往古熊井理左衛門の開拓する所にして。初め理左衛門町と稱したり。元祿八年に

- 相川町分 相川町 永代町門前町門前町

●深川諸町

◎位置及區域

深川諸町は。油堀西横川の西畔に在る市街にして。其の東は巽河岸を隔て、油堀西横川に臨み。西は熊井町と富吉町とに接し南は大島川に界し。北は富吉町の一部に對せり。土地の番號は一より十三に至る。

◎町名の起原並沿革

深川諸町は。舊獵師町八區の一にして。寛永六年諸彦左衛門の開築せし所に係る。故に當時は彦左衛門町と稱したり。寛文十年々貢地となり。元祿八年六月四日檢地ありて。四石三斗六升四合段別三段六畝十一歩と定めらる。其の際彦左衛門の氏を取りて今の町名に改む。明治二年相川町の飛地半町を合す。

●福島橋

福島橋は。油堀西横川に架す。諸町と中島町の連絡道路にて木造長さ十間幅六間の橋なり。

幕府時代の橋は。長七間、幅二間とあり。創架年月詳かならず。元祿十六年三月二日官費を以て換架せし以來。所謂「御入用橋」となりしと。現架のものは。明治三十一年十二月落成なり。名義の出る所明確ならざれども。富吉町の方より中島町に向へるものなれば。兩町の二字を取りしにはあらざるか。

●深川魚市場

深川魚市場は。諸町、申島町、大島町及び蛤町一丁目に亘り。毎朝四時前後に開市す。事務所は中島町に在り。

當市場は貝類及び河魚を主とし。組合員七十五名にして。其中仲買人十六名問屋五十九名あり。

貿易備考に云。深川魚市場は。天正年間攝津國の漁夫茲地に來り。深川(現今の元町)に住居し。漁業を營爲せしに濫觴せり。爾來同業者漸く繁殖し。其他捕獲する所の魚を買収し。

他方に販賣す。之を地小賣といふ。寛永中新街を開き。漁師町と總稱せしが。後ち日本橋四組問屋の仲買となり。安政五年町奉行より下命せられ。七組魚問屋中日本橋本船町組に班入せり。維新の後特に市場を開設し。官許を得て深川魚市場と稱すと。東京案内に據れば。魚市場の開設は。明治十三年七月なり。

○位置及區域
深川富吉町は。油堀西横川の西畔に位せる市街にして。其の東は奥野河岸を隔て、油堀西横川に臨み。西は熊井町と相川町に連り。南は諸町に隣り。北は小松町と佐賀町二丁目の四十六番地に接せり。土地の番號は一より三十に至る其の中十九、二十六の二番地を缺けり。

●浅川富吉町

○町名の起原并沿革

探川富吉町は。舊獵師町八區の一にして。寛永六年富吉助十郎の開築したる所なり。因て當時は助十郎町と唱ふ。寛文十年々貢地となり。元祿八年六月四日檢地ありて。高九石九升

處なり。元祿十四年商店を開き。正徳三年閏五月町方支配に屬せり。小松の稱は隣町の松賀町に對せしものなるべし。明治五年三月眞田信濃守(舊松代藩)の土地及び土地を合す。里俗に當町を乾鰯場と唱ふ。舊時當町の東より西永代町まで。乾鰯問屋の所有地なりしに因る。

●深川倉庫廻米量

深川は實に東京二百萬人の倉庫なり。即ち其の食糧は貯藏して此に在り。而して此より出入して其の供給に應ずるものなり。今三十九年深川諸倉庫廻米量(地廻、東海道、越中、三陸、兩羽、大上の米及び外國米等)を記さむに左の如し。

三十八年より持越高	千四百十五萬〇二百八十六俵
三十九年藏入高	三百三十九萬九千二百三十四俵
合計	千七百五十四萬九千五百二十俵
内 藏出高	三百九十一萬九千七百三十二俵
年末現在高	千三百六十二萬九千七百八十八俵
三十五年以降の廻米量は左の如し。	
三十五年	二百七十五萬八千四百〇三俵
三十六年	三百七十三萬二千二百五十七俵
三十七年	二百二十四萬四千六百七十俵
三十八年	三百七十八萬八千二百三十八俵

●東京倉庫株式會社

東京倉庫株式會社は小松町に在り。明治二十年四月故川田小一郎、莊田平五郎兩氏の發起開業にして。現今の資本金は二

二合段別七段五畝二十三歩と定めらる。其の際助十郎の氏を取りて今の町名に改む。文政十一年の錄上書に町内總間數三十二間五尺三寸とあり。明治五年に至り。元海軍所土地及び土地寺域を併合せり。

里俗に當町福鳥橋の北を奥之町と唱ふ。

●正源寺

正源寺は富吉町六番地に在り。深川山と號し。貞徳院と稱す。淨土宗にして芝増上寺の末なり。開基は伊奈半左衛門にて。開山は專蓮社南譽上人終古自玄大和尚とす。

本尊は行基の作十一面觀世音にて新田義貞の守本尊なりといふ。又圓光大師の像を安置す。市内四十八願所中第四十八番なり。當寺の門は黒塗にて。本堂まで敷石あり。堂前の鐵製貯水盤に嘉永五年歲次壬子夏五月吉日當山十二世造建主博譽代と鐫せり。

●深川小松町

○位置及區域

深川小松町は。油堀西横川の西畔に位せる市街にして。其の東は油堀西横川に枕み。西は富吉町の一部と佐賀町二丁目の一部に接し。南は富吉町に隣り。北は油堀西横川西入江に限り。土地の番號は二より十五に至る。其の十二番地を缺けり。

○町名の起原并沿革

深川小松町は。往昔瀕海の地にして。木材商の木石を置きし

百萬圓なり。營業科目は普通貨物保管、保税貨物保管、警備所業、貨物積卸受渡、保管貨物に係る諸般の代理取扱なり。

四十一年五月末の保管貨物の評價金は三千三百八萬圓餘とす。當社は本邦倉庫業の始にて。倉庫及び土家は東京、大阪、神戸等に在り。東京の分は九千五百四十七坪一三とす。

●深川松賀町

○位置及區域

深川松賀町は。油堀の南畔に在る市街にして。其の東は河岸地を隔て、油堀西横川に臨み。西は佐賀町二丁目に對し。南は油堀西横川西入江に界し。北は油堀に枕めり。土地の番號は一より十に至る。其の中六番地を缺けり。

○町名の起原并沿革

深川松賀町は。元末場町にして。元祿十三年十二月代官伊奈半左衛門に申請し。江戸町并家作の許可を得。祝して以て今の町名を附したり。正徳三年閏五月始て町奉行の支配に屬せり。

里俗に當町を河岸通り油堀と稱し。東方を伊呂波藏と唱ふ。もと九郎右衛門といへる豪商の倉庫四十八棟ありしに因る。

●緑橋

緑橋は市設の主橋にして、油堀西横川に架し。松賀町より一色町に連絡す。長さ十間幅二間半あり。御入用橋簡所書に「文政十一子年掛替、天保十一子年掛替、

石垣築立」とあり。現在のものは明治三十五年三月竣成せしものなり。接するに。縁橋の名は松賀町より縁を取りて名けしものなるべし。

●深川堀川町

◎位置及區域

深川堀川町は。油堀左支川の北畔に在る小市街地にして。其の東は油堀西横川に界し。西は佐賀町一丁目に連り。南は油堀左支川に枕み。北は中之堀に限れり。土地の番號は一より七に至る。

◎町名の起原并沿革

深川堀川町は。往時海岸の寄洲にて元祿十三年十一月の開設に係る正徳三年閏五月に至りて。他町と同じく町方の支配に屬せり。町名の由來詳かならず。文政の錄上書に。町内東西間口京間三十七間裏幅同斷南北裏行二十四間とあり。

●千鳥橋

千鳥橋は油堀に架し。堀川町より松賀町に連絡す。市設の木橋にして。長さ十二間幅四間あり。創架の年月明かならず。御入用橋簡所書に。千鳥橋長十二間半、幅二間。文政八酉年入札に而掛替。天保八酉年掛替。石垣築立に成ると見ゆ。現在のものは。三十六年三月の換架に係る。

●元木橋

之町内南之方川筋並東之方川筋、前後御埋立に相成、東南地先え御堀割に而中之堀出來、左右え相通し候、か、れば其の開鑿は元祿十三年以前と知るべし。

●田中橋

田中橋は。中之堀に架し。中川町より富田町に連絡す。私設の橋梁なり。府内備考に記する所左の如し。

田中橋 幅七尺長八間

右富田町西之方に有之、同所中川町え相渡り候橋に而右兩町地主共入用を以相掛け候橋に御座候、異變取計方之儀同様兩町に而仕來申候、右起立書留無御座相知不申候、名目之儀は元祿年中御買請之後名主市郎次先祖其頃か正徳年中迄、町内住居仕、右家前之橋に付家號田中と申候か、里俗に相唱來候由申傳候、

●深川富田町

◎位置及區域

深川富田町は。西南中之堀を抱擁したる小市街にして。其の東は西永代町に隣り。北は今川町に對せり。土地の番號は唯一番地あるのみ。

◎町名の起原并沿革

深川富田町は。元祿十三年十一月の開設にして。正徳三年閏五月始て町方の支配に屬せり。町名の由來は詳かならず。文政の錄上書に。町内南北間口京間四十九間餘。裏幅同斷東西裏行十八間半餘とあり。

元木橋は油堀左支川に架し。堀川町より材木町に連絡す。市設の木橋にして。長さ十二間、幅四間あり。本橋は元木場町中程に在りしを以て名く。即ち元木場橋の略なり。創架年月詳かならず。

御入用橋簡所書に。元木橋長さ十二間半、幅二間。文政十一子年掛替。天保十亥年石垣に成。掛替長減改ると見ゆ。現在のものは明治三十四年七月の換架に係る。

●深川中川町

◎位置及區域

深川中川町は。東北中之堀を以て抱擁したる市街にして。其の西南は佐賀町一丁目に面せり。土地の番號は僅かに一より五番に過ぎず。

◎町名の起原并沿革

深川中川町は。昔時海岸の寄洲なりしが。元祿十三年十一月市街を開設し。中之堀に沿ひたる市地なるを以て名くるに中川を以てせり。正徳三年閏五月始て町方の支配に屬しぬ。里俗に當町を中之堀と唱ふ。

●中之堀

中之堀は仙臺堀と油堀の中間に在り因て名く。府内備考中川町の條に云。

元祿十三辰年十一月申、町人共御代官伊奈半左衛門様え申立、江戸町並同様家作御改御免之地所に被成下候様奉願、御開濟之上代金上納仕、引續町名相願候、前書御買請以前

●深川今川町

◎位置及區域

深川今川町は。仙臺堀の南畔に位せる小市街にして。其の東は油堀西横川に限り。西は佐賀町一丁目の三、四番地に面し南は西永代町と富田町とに對し。北は仙臺堀に枕めり。土地の番號は僅かに四に過ぎず。其の中三番地を缺けり。

◎町名の起原并沿革

深川今川町は。元祿十三年の開設にして。正徳三年閏五月町方支配に屬したるものなり。町名の由來詳かならず。文政の錄上書に町内東西間口京間六十四間半餘、裏幅同斷、南北裏行二十一間餘とあり。

●松永橋

松永橋は。油堀左支川に架し。今川町より永堀町に連絡す。市設の木橋にして。長さ十間幅三間あり。

御入用橋簡所書に云。松永橋長十間幅二間。文政七申年入札掛替天保十亥年掛替。現在のものは明治三十年四月の換架に係る。

●深川西永代町

◎位置及區域

深川西永代町は。油堀左支川の西畔に在る小市街にして。其の東は油堀左支川に枕み。西は富田町に接し。南は中之堀に限り。北は今川町の一部に面せり。土地の番號は一より七に

至る。其中四番地を缺けり。

◎町名の起原并沿革

深川西永代町は。東永代町に對し其の位置西に在るを以て名く。但其の開設は元祿十三年十一月にして。東永代町より三箇月早し。文政の録上書には。町内南北京間四十八間五尺、東西十八間五尺とあり。里俗に當町を干鰯場と唱ふ。當町並に小松町に干鰯市場ありて。河岸に干鰯槽を揚陸するに因れり。

◎深川東永代町

◎位置及區域

深川東永代町は。油堀第一左支川の東畔に在りて四邊形を成せる市街にして。其の東は大住町と材木町の二十番地に對し西は河岸地を隔て、油堀第一左支川に限り。南は材木町に接し。北は永堀町に連れり。土地の番號は一より十五に至る。其中十一番地を缺けり。

◎町名の起原并沿革

深川東永代町は。もと木場の跡にて。元祿十二年埋築し。十四年三月市店を開設せしものなり。東京家内には永代島と呼びし云々とあれども。確證なし。永代島は富岡公園の邊なり。其の東といへるは西永代町に對して其の位置より名けたるや明かなり。正徳三年閏三月町方の支配に屬せしこと他町に同文政の録上書に。町内南北京間六十九間半東西二十間とあり

◎廻米問屋山崎商店

廻米問屋山崎商店は東永代町に在り。府下屈指の同米問屋にて。店主は山崎繁次郎氏なり。明治二十四年以來委託販賣を專業とす。氏は夙に米穀及び倭造の改良を唱道せるは人の知る所なり。

◎深川永堀町

◎位置及區域

深川永堀町は。仙臺堀の南畔に在る市街にして。其東西は油堀第一第二の左支川に臨み。南は大住町と東永代町とに連り。北は仙臺堀に界せり。土地の番號は一より十五に至る。其中十二番地を缺けり。

◎町名の起原并沿革

深川永堀町は。もと本場の一にして。元祿十三年十二月始めて市店を開設し。正徳三年閏五月町方の支配に屬せり。永堀の名稱詳かならず。

◎用達半兵衛

當町家持に半兵衛と稱する者ありて名高かりし。祖先は京都の人にて寛永年間江戸に來り。本兩替町に居住し。辻兩替を營業とせり。其の頃より水戸家の用務に従事し。二十五人扶持を領し。同家紋附高張同箱提燈三張、半長持三棹を給與せられ。火事場并に道中は帶刀を許さる。尋ぎて松平陸奥守より百五十人扶持を領し。正徳年間松平肥後守より七十五人扶持を領す。元文元年幕府より爲替の公用を命せられしが。其後解職し。延享元年九月買置米の公用を奉じ。明和三年より

當町に移れり。當時は陸奥守より三百俵肥後守より三十五人扶持を領し。文政十一年にて七代相續せり。而して同家には寛永年間本兩替町居宅修築の際土中より獲たる唐銅釜（徑一尺四寸深一尺二寸）を藏せしと。同年の録上書に見ゆ。

◎相生橋

相生橋は。市設の木橋にして。油堀左支川に架し。永堀町より萬年町一丁目に連絡す。御入用橋簡所書に相生橋長五間半、幅二間。天保元寅年掛替。同十一年掛替石垣に成ると見ゆ。現在のものは長さ五間半、幅二間半にて。明治二十八年九月の換架に係る。

◎深川大住町

◎位置及區域

深川大住町は。油堀第二左支川の西畔に在る市街にして。其の東は同支川に臨み。西は東永代町に對し。南は材木町の一部に接し。北は永堀町の一部に隣れり。土地の番號は二より九に至る。

◎町名の起原并沿革

深川大住町は。もと清住町代地（寶曆七年清住町に靈雲院建立の時代地となる）と海邊大工町との二箇町なりしを。明治二年四月之を併合し。大工町清住町の各一字を取りて新に今の町名を附したり。

◎深川材木町

◎位置及區域

深川材木町は。油堀の北畔に在る市街にして。其の東西は油堀第一第二左支川に限り。南は油堀に枕み。北は大住町と東永代町とに接せり。土地の番號は一より二十に至る。其中六、十七の二番地を缺けり。

◎町名の起原并沿革

深川材木町は。往時海邊の寄洲にて。寛永の頃材木町、三十間堀並に神田邊の材木問屋の貯木場となりしが。元祿十二年之を公收し。代官伊奈半左衛門工事を督して埋築し。十三年より左の市街地を開設せり。即ち

材木町 永堀町 東西永代町 今川町 中川町 富田町
堀川町 松賀町 小松町 富久町 萬年町 自一丁目至三丁目
の十四町にして。後ち増して二十一町となれり。當町は當時材木商多く居住せしを以て材木町と稱せしなり。正徳三年閏五月町方の支配に屬せしこと他町に同じ。

◎元木場町

幕府時代元木場町と唱へしは。二十一ヶ町なり。此地は幕府の御拳場即ち放鷹場にて。鳥見方公用の際は。元木場町之内何町と書するを例とす。町奉行所拜年の時は。元木場町名主市郎次と記したりといふ。

組合町名左の如し。
材木町 東西永代町 今川町 富田町 中川町 堀川町
松賀町 同續拜借屋敷 小松町 永堀町 富久町 萬年町
自一丁目 伊澤町 三角屋敷 久永町 自二丁目 富岡町 松村町
至三丁目

● 深川一色町

◎ 位置及區域

深川一色町は。油堀の南岸に沿ひたる市街にして。其の東北は油堀に界し。西は油堀西横川に限り。南は伊澤町、松村町と黒江町の一部とに對せり。土地の番號は一より二十三に至る。其の中十六、十七、二十二の三番を缺けり。

◎ 町名の起原並沿革

深川一色町は。舊木場の内にして。三十間堀材木問屋所管地の跡なり。元祿十三年十二月より同十四年四月に至るの間兩次に靈岸島銀町伊勢屋八四郎等八人代官伊奈半左衛門に申請し。江戸町並家作の公許を得。始て市店を開設し。古來此地に居住せし材木問屋一色千左衛門の氏を取りて町名とす。正徳三年閏五月町方支配に屬し。以て明治に至れり。

◎ 景況

當町は油堀に沿ひし市街地にして。倉庫多く。稍々閑靜なり。商家には十四番地に肥料販賣所奥村商店。十一番地に奥田清兵衛等あり。

● 吉成稻荷神社

吉成稻荷神社は。一色町八番地に在り。小祠にして軒頭に「吉成稻荷大明神」と扁す。木製の小鳥居一基路傍に建てり。

○ 富岡橋

番號は一より二十四に至る。

◎ 町名の起原並沿革

深川松村町は。舊木場にして後武家の邸宅となり。又土地となりしに。享保六年四月木挽町續松村町拜領町屋敷の内公用地となり。其の代地として醫師并に小人等に給與せられしものに係る。明治二年四月に至り。其の東方の下谷阪本町代地を合せ。五年十月更に大場、田村、高田、有賀、武井、山本、大竹、野田、岡島九氏の土地を併せり。

舊受領地主文政の書上には。松川紋次、白井藤三郎、高橋

助三郎、大森市左衛門、深町權兵衛、田村新兵衛、山田傳藏、朝比奈三八、井上與市、福井立助、吉村百助、成家善藏、吉澤八之助、加藤郡兵衛、井上玄丹とあり。

阪本町代地は。享保三年東叡山領下谷阪本町一、二丁目西側裏山裾通りの分火除地となり。其の代地となりし者なり。

● 深川福住町

◎ 位置及區域

深川福住町は。油堀西横川の東岸に位し。東は電車線路に沿ひて黒江町に對し。西北は西横川と東入堀に限り。南は永代橋直東の大路を隔て中島町に向へり。土地を區劃して一番地より二十九番地とす。

◎ 町名の起原並沿革

深川福住町は。もと北川町、蛤町三丁目、奥川町、黒江町代地、大島町代地の五區なりしを。明治二年四月之を合して一町とし。祝して以て町名を附す。同五年十月萬徳院、因速寺

富岡橋は一色町より平野町(今の萬年町)に架したるものにて舊切繪圖に據れば。今の黒龜橋より少しく西寄りの位置に在り。里俗に團魔堂橋と唱ふ。長さ十間三尺幅一丈三尺ありたり。御入用橋箇所に。文政八酉年入札掛替。天保八酉年掛替。弘化四未年掛替」とあり。

● 深川伊澤町

◎ 位置及區域

深川伊澤町は。油堀西横川の東畔に位せる市街にして。其の東は松村町に對し。西は河岸地を隔て、油堀西横川に限り。南は油堀西横川東入江に界し。北は一色町の一、二番地に面せり。土地の區劃は一より九に至る。

◎ 町名の起原並沿革

深川伊澤町は。舊木場の内なりしが。元祿十四年幕府坊主衆の受領地となり。家屋を新設し。町名を附したり。町名の由來は詳かならざれども。受領者中の氏名ならむか。正徳三年閏五月他町と同じく町方の支配に屬し。以て明治に至れり。舊受領地主文政の書上には。西村長順、宇佐美俊陸、小阪長俊、内田善六、大竹祐益、中林吉之助、青柳宗知とあり。

● 深川松村町

◎ 位置及區域

深川松村町は。油堀の南岸に在りて。東は幾ひと三角形を成して一色町の一部と黒江町に沿ひ。西は伊澤町に平衡し。南は油堀西横川東入堀に臨み。北は總て一色町に對せり。土地

の兩寺地を併合せり。

北川町は元祿年間西緋屋町助成地并に北新堀町代地となりしものなり。町内間數京間百四十三間四尺三寸。

奥川町は。元祿十三年芥改役忠兵衛、三郎兵衛、平兵衛、與市の四人に下付せられし町屋敷なり。總坪數六百五十七坪三合。町名伊奈半左衛門の指命に係るといふ。もと當町東の方川端に非人小屋あり。深川非人頭孫太郎之を支配す。

● 澁澤倉庫部

澁澤倉庫部は。澁澤榮一氏の營業に屬す。明治三十年三月の開始に係る。四十年度に於ける保管貨物取扱高は。總入庫數約一百九十三萬個。其の評價金一千五百六十萬八千一百餘圓とす。部長は澁澤篤二氏にて支配人は同家理事八十鳥親徳氏なり。

● 因速寺

因速寺は福住町二十一番地に在り。眞宗にして京都東本願寺の未なり。寛永六年僧定玄の開基に係る。門柱に毎月十九日午後一時相續講説教と標示す。本堂は土藏建りにして。右に庫裡左に鐘樓あり。寺寶には阿彌陀像(真心或は理應)一見眞大師像各一軀、見眞大師筆慧燈大師筆各一軸、一休和尚筆一軸、徳川綱吉公筆布袋圖一幅を藏す。(萬徳寺は後に出す)

● 深川中島町

◎位地及區域
深川中島町は。永代橋東大通りの東畔に在りて。東は黒江川に枕み。西は油堀支川を控え。南は大島川に對し。北の一方のみ道路を隔て、福住町に接続せり。土地の番號は一より十七に至る。

◎町名の起原並沿革
深川中島町は。元祿十二年の開設にして。南小田原町、南本郷町、靈巖島川口町の代地なり。其の地川に枕み。恰も島嶼の如くなるを以て。此名を附せり。里俗には江戸町とも稱し。右町よりの引地たるより。深川新設諸町の組合に入らざりしといふ。明治二年四月北方北川町三分の一を本町に合せり。里俗に大島川の沿革を演通り又濬通りと唱ふ。

◎巽橋
巽橋は。油堀西横川に架す。中島町と諸町を連絡す。木製にして長七間幅三間あり。もと無名なりしを明治に至り。巽位に當るより此く名けしものと見ゆ。
創架は寛文元年にて。幕府の吏員岡田五郎助其の工事を督す。寶永二年同石川吉太夫修繕し。同五年橋臺を石垣と爲し。同六年原佐一右衛門兼督の下に換架せり。其の後の書類逸して傳はらず。現在のものは明治三十三年五月落成したるものに係る。

◎舊御拳場
深川中島町邊は將軍の鷹場なりしとなり。府内備考に。此邊

御拳場内にて、御鳥見方江差出候御證文等、武州葛飾郡西葛西領深川中島町と認め來り申候、とあり。

◎深川大島町

◎位置及區域
深川大島町は。越中島町の北位に在りて。蛤町一丁目と同じく一嶼を爲したる市街地にして東西に延長し。東南西の三方は大島川に臨み。北方は蛤町一丁目に連接す。土地の番號は一より十七に至る。

◎町名の起原並沿革

深川大島町は。獵師町八區の一にして。寛永六年の開築に係る。當時の地形たる南東は海岸にて。西北は低地たり。其の形恰も島に似たるを以て名く。初めは月行事持にて名主はなかりし。元祿七年以降助右衛門之を支配す。同八年檢踏ありて。高十六石段別一町三段四畝五歩と定めらる。正徳三年始て市街の班に列す。町内總間數二百五十八間九寸。明治に至りても變更なし。但代地は奥川町續、越中島町續きに在りしが。共に現在の其の町に合一せり。

◎大島川

大島川は。大川の支川にして大島町の南東を流れて更に東方に直流す。大島町に沿ふを以て此名あり。南方の分は大島町の創立頃より開通あり。東方の分は元祿十二年築地普請奉行深津八郎右衛門兼督して開鑿せしものなり。

◎深川蛤町

出世稻荷社は。同番地に在り。小祠にして祠前に木製鳥居一基あり。點燈に出世稻荷社、佃勝と題す。

◎深川黒江町

◎位置及區域

深川黒江町は。永代橋直東大路の東北に分在せる市街にして。最も不規律の形狀を成し。道路の爲めに數區に分裂せり。其の東は出入甚しく。富岡門前仲町中央に穿入し。西の大部は斜に電車線路に沿ひて。福住町に對し。一部は線路以西に在りて。松村町に臨み。南は蛤町一二丁目に向ひ。北は油堀に限れり。土地の番號は一より四十に至る。其の中十八、二十四、三十二、三十三、を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

深川黒江町は。獵師町八區の一にして。開拓者の名を以て助右衛門町と稱せし地なり。寛文十年年貢地となり。元祿八年六月四日檢地ありて高二十四石九斗九升二合、反別二町八畝八歩と定めらる。其の際黒江川に沿ふを以て今の町名に改む。正徳三年市街に列す。明治二年四月に至り。其の東北なる佐賀町二丁目代地を併せり。

◎里俗の稱

- 濱十三町 北方黒江川河岸通り
- 通黒江町 舊八幡橋通り
- 東黒江町 舊阪本代地町向合の所かはらけ町とも唱ふ
- 日影町 舊久中橋より黒江橋南河岸通り
- 西念寺横町 西念寺脇横町

◎位置及區域

深川蛤町は。分ちて二丁とす。一丁目は二丁目と川を隔て、分離し。東西北の三面は總て黒江川に臨み。南は大島町に連接す。二丁目は。其の東に在りて。東西に細長形を成し。東は富岡門前町に對し。西は黒江川に臨み。南は大島川に沿ひ北は富岡門前仲町の一部と黒江町の一部に密接せり。土地の番號は左の如し。

- 一丁目 一より五に至る
- 二丁目 一より十三に至る

◎町名の起原並沿革

深川蛤町は。慶長元年開拓し。海邊新田の内に屬せり。寛永慶安の頃將軍隅田川に出獵の際。土人蛤を獻上せしより海邊蛤町と稱す。後ち單に蛤町といふ。其の地四ヶ所に分離す。一は大島町の北に在りて里俗に上二丁目といひ。一は北川町の北、奥川町の西に在りて里俗三丁目と唱ふ。今は福住町に合す。一は永代寺門前仲町の南裏に在りて里俗一丁目二丁目と呼び。一は冬木町の西即ち寺裏に在り。今和倉町に合せり今の一丁目は舊上二丁目にて。内藤外記久住の地なるを以て里俗に外記殿濱通りと稱す。今の二丁目は舊一丁目二丁目にて。明治二年今の如くに改めたり。

◎阿芳稻荷社 出世稻荷社

阿芳稻荷社は。蛤町一丁目二番地に在り。小祠にして阿芳稻荷社の扁額を掲ぐ。祠前には木製の小なる鳥居三基あり。

◎景況

當町は永代橋通りにして電車來往し。且つ深川公園に接近し居るを以て。甚だ繁盛せり。百十番地に黒江町郵便局(三等)あり。大通り商家には株式會社深川銀行(三十三年二月創立、資本金十萬圓)、武藏屋陶器店、大野砂糖店、齋藤下駄店、大野屋系店、長谷川油店、玉木屋菓子店、寄席櫻亭、渡邊唐物店、宇治茶店、東屋吳服店、北國屋吳服店、升長乾物店、宮崎屋陶器店、天賞堂時計店、永代銀行(三十一年二月創立、資本金五萬圓)、鹽瀬菓子舗、日本潜水株式會社、龜岡系店、料理店みやこ等あり。

●商業倉庫株式會社

商業倉庫株式會社は。黒江町三十一番地に在り。明治三十七年三月の創立にして。一般倉庫の業を營爲す。資本金五十萬圓本店は黒龜橋畔電車停留場附近に。倉庫は黒江町、東元町、右石場町等水陸至便の地に分在す。現時保管貨物の價格は三百萬圓より六百萬圓の間に在り。社長は若宮正音氏なり。

○舊黒江川

今黒江川と稱するは。中島橋下より北の方黒江町角に至る入堀と福住町と伊澤町との間なる入堀を稱すれども。もとは兩堀連絡し。東北の方に通じて舊富岡橋即ち今の黒龜橋の稍々東南に達し。油堀に合せしものなり。今は埋めて電車線路となれり。此川は往昔干瀉に水路あり黒江川と稱せしを。寛永六年黒江町開築の際。開鑿せし者に係る。其の川幅は八幡橋

正面に横綱力士碑と大書深刻し。左右に明治二十八年三月吉且、太宰府宮小路康文書とあり。背面に力士榮譽横綱歴代とあり。海軍大將祐享篆額と高林五峰の書に係る。列刻せる横綱力士の名は左の如し。

- 初代 寛永元年より 明石志賀之助
 - 二代 享保二年より 綾川五郎次
 - 三代 享保十八年より 丸山權太左衛門
 - 四代 寛政元年より 谷風梶之助
 - 五代 同 二年より 小野川喜三郎
 - 六代 文政十年より 阿武松緑之助
 - 七代 同 十一年より 稻妻大五郎
 - 八代 天保十一年より 不知火諾右衛門
 - 九代 弘化二年より 秀山雷五郎
 - 十代 安政五年より 雲龍久吉
 - 十一代 文久二年より 不知火光右衛門
 - 十二代 慶應元年より 陣幕久五郎
 - 十三代 明治元年より 鬼面山谷五郎
 - 十四代 同 十年より 境川浪右衛門
 - 十五代 同 十七年より 梅谷藤太郎
 - 十六代 同 二十五年より 西海嘉次郎
 - 十七代 同 二十九年より 小錦八十吉
 - 十八代 同 三十四年より 大砲萬右衛門
- 前面左右に安政四年正月興行二日目取組肥後不 火光右衛門と出雲陣幕久五郎の相對抗せる肖像の刻碑を建つ。其の他賛助の氏名を刻せしもの等あり。此發起人は當時京橋區北新堀

際八間。久中橋西十二間。同東五間。黒江橋際七間あり。八幡橋は。公園通りに在りたり。八幡宮へ通行の橋なるを以て名く。長七間幅二間あり。久中橋は。今の福住町東角に在りたり。長六間幅九尺あり。黒江橋は。油堀に出る處に在りたり。長幅共に久中橋に同じ。

●深川公園

深川公園の事は。明治三十年十一月廿五日發刊したる名所圖會第十編全部に詳記し置たれば。今こゝに贅せず。但其の逸事と其の後に建設したる碑文等を記載すべし。

壬生狂言

永代寺に於て時々神佛の開帳ありたるが。寛政二年庚戌の春京都大佛の内辨天の開帳を爲せし際。境内見せ物に壬生狂言を出す。此狂言専ら世に行はれて。兩國に於ても見せ物とし。期間の輩も酒宴の興に之を學べり。

巫女おん

寶曆五年乙亥三月廿五日より永代寺にて。信州戸隠明神九頭新權現の開帳ありし際。神樂を舞ひし巫女美女の評判高く。其の名をおんといふ。踊子の事を俗におんといふは是より起れりとぞ。

忠魂碑

境内東方に明治卅七八年役戰死者忠魂碑あり。正四位勳三等男爵澁澤榮一謹書と刻せり。

横綱力士碑

横綱力士碑は富岡八幡神社裏手に在る數基の巨碑なり。壇上

町一番地に住せし秀山雷五郎門人陣幕久五郎土師通高なり。

○江戸勸進相撲の起原

深川永代寺門前仲町忠兵衛店相撲行司木村庄之助が。文政十年十一月晦日の録上書に左の如く見ゆ。是ぞ江戸勸進相撲の起原なり。

御府内相撲起立は。寛永年中寺地爲造營。御屋敷様方より力士相頼。寄相撲致來候處。其後勸進相撲年寄行司共より度々御願申上候處。御聞濟無之。貞享元年中寺社御奉行本田淡路守様え奉願上候得ば。願之通り勸進寄相撲御免被御付候に付。深川八幡境内に而始而興行仕。夫より永御免に而相撲年寄共申合。年々四季に所々に而勸進相撲興行仕候。

寛永の相撲場所は。四谷鹽町三丁目笹寺なり。又本所回向院は寛政三年四月を始とす。

○二軒茶屋

二軒茶屋は富岡八幡神社の境に在りたる料理店の稱なり。二軒ありし故に世にかく唱へしならむ。明和、天明の頃。西太郎(牛御前門前)大黒屋孫四郎(松葉社手前)武藏屋權三郎(同所麥斗庵)甲子屋(眞崎)四季庵(中洲新地)百川(伊勢町裏河岸)と同じく大に流行したるものなり。江戸名所圖會に。二軒茶屋雪中宴遊の圖あり。以て當時の状況を窺ふべし。

●富岡門前仲町

○位置及區域

富岡門前仲町は。公園前大通りに沿ひて位置し。其の區域不整にして。東の一部は黒江町の東頭に分隔し直進して。富岡門前町に接し。大部は富岡門前山本町に對し。南西は出入して黒江町に界し。北端は油堀に臨みたり。土地の番號は一より四十九に至る。其の中二十八番地を缺けり。

○町名の起原並沿革

深川富岡門前仲町は。もと永代寺の受領地内に屬し。永代寺門前仲町と稱したり。承應二年四月始めて市店を開設し。元禄十年六月より控地と唱へ。町民之を所有し。永代寺へは一ヶ年地子銀夫銀共金八十五兩と銀四匁二分一厘六毛を納む。明治二年に至り。今の町名に改め。五年富岡社地の内を合したる。

○里俗の稱

馬場通り 舊一の鳥居より東仲町境入船町に至る
疊横町 舊一の鳥居通り南方西の方横町をいふ。往昔疊屋平左衛門居住せしに因る。
行留り横町 南側中程の横町なり。
摩利支天横町 南側東の方横町なり。
銀座長屋 舊一の鳥居通り北側中程十五間の間をいふ。往昔銀座用達大黒屋作左衛門居住せしに因る。
西横町 入堀通り横町をいふ。富岡境内より西に當るを以て名く。
猪口長屋 西横町中程凡そ十間の處をいふ。往昔猪口

錢屋長屋

同横町の内長さ二十間の處をいふ。往昔錢屋久兵衛と稱する者居住せしに因る。

○景況

當町は公園に通ずる要路なるを以て四時繁昌せり。商家には洋燈商伊勢屋、近藤油店、宮田屋吳服店、倉信靴店、大黒屋酒店、木村屋、北村醫師、佐藤小間物店、料理店ひさご、信濃屋砂糖店、袋物商足立屋、仲町布教所、深川座、大和家、上總屋吳服店、葬具商弘善社、大野屋足袋店等あり。

●深川座

深川座は。小劇場にして富岡門前仲町四十四、五番地に在り。明治二十五年九月の創立に係る。初め新盛座と稱す。三十年に至り今の名に改む。建坪二百坪を有す。座附の茶屋に大和屋あり。觀劇料は大約木戸七錢、平土間及正面機敷二十錢、高土間二十五錢、鶉三十錢とす。

○紀文晩年の居住地

紀文は一代の富豪にして大盡と稱せられ。江戸にて全盛を極めしは。人の皆知る所なり。晩年の居住地は深川一の鳥居の側なりしといふ。

○料理店升屋

武江年表享保十九年甲寅の條に云。四月二十四日紀伊國屋文左衛門死す。所謂紀文大盡なり。俳號を千山と云。靈巖寺中淨心寺院に墓あり。晩年深川一の鳥居の側に居して終れり。

網打場松村町

あひる 細町の事なり、房州野暮郡の船頭此に移り住せしに因る

料理店升屋は深川洲崎に在りたり。當時洲崎と稱せしは。富岡門前の地なれば此邊にありしものと見ゆ。(辨天の邊にや同書に云。升屋宗助深川洲崎。此升やといへるは。江戸料理屋の魁首にして。最大厦なり。あるは宗助升億と號び。薙髮して祝阿彌と云。京丸山の茶亭に何阿彌といへるに倣へるなるべし。庖丁に名を得たるものにして。しかも好事なり。其家の經營美を盡し。數奇屋二三箇所鞠場まで構たり。貴人公子もこゝに遊ぶ給ひ。或君より望陀覽といへる文字を鑄物にしたる扁額を給ひぬ。其頃の富商も皆こゝに遊びけるとぞ。寛政の初津浪にかゝりて其跡だになくなれり。此額のしいかゞしてか残りてありしを。近き頃俳優何某に與へし人ありとぞ。望陀覽は望陀郡を覽るの意か。

洲崎茶樓寓目

釋六如

高樓瀕海氣清哉。時復斜陽潑眼來。青葙風生驚驟雨。白砂湖走作晴雷。西山突兀撐天立。南地淡茫吞澤開。指點虛無情漫切。欲緹鯨背問蓬萊。

○昔時深川妓院の繁昌

昔時深川の妓院甚だ繁昌し。幾ひと新吾原にも譲らざるの觀ありしが。素より公許のものにあらざりしに因り。水野越前守の大改革に際し。天保十三年三月十八日を以て悉く禁絶せられたり。其の場所は左の如し。

- 深川仲町 仲町と稱すれど
- 古石場 越前中
- 裾 山本町
- 新 地つき新地
- 新石場 同所確定
- 櫛 下山本町

江戶繁昌記に當時の盛況を記して云。深川繁昌、狹路爲最、日土橋、日中町、新地云、石場云、併橋下、裳繼齋坊、凡七所、更細算之、櫛下有表裏之差、石場有新古之別、至妓院之數、不知上幾千戸、其間自有盛衰、旺氣互寄、聞昔者土橋爲盛、今則運於中町、新地漸屬冷索、石橋却向熱鬧、然其運畢竟不外出、以今較昔、還是爲二大繁昌、一刻豪遊、萬金車載、爭輸其間、可謂盛矣、深川之俗、原來與吉原反、娼家聽客拉妓出、乃每歲元旦洲崎拜旭之遊、爲第一番、龜井戸之梅、墨田川之雪、佃島狼煙、兩國納涼、莫弗往焉、吉原則色爲重、威嚴爲貴、繡衣畫裳、粧色欲濃、深川則藝爲重、洒落爲貴、淺脂薄粉、飾樣欲淡

天保以前の繁昌は前記の如し。嬉遊笑覽に往時の景況を記して云。永代島は紫の一もとに。八幡のやしろ有り。此地江戸をはなれ。深川の地にて宮居遠ければ。參詣の人も稀にして島の内繁昌すべからずとて。御慈悲を以て御法度もゆるがせなれば。八幡の社より手前二三町が内はみな表店は茶屋なり數多女を置て參詣の輩の慰とす。就中鳥居より内を洲崎町の茶屋といひて。十五六。二十ばかりの女のみめかたも勝れたるを。十人計づゝかゝへ置て。酌をとらせ小歌うたはせ。三線を彈鼓を打て。後はいさ踊らむとて。當世はやる伊勢踊云々。風流なる事三谷の遊谷も爪をくはへ塵をひねる。花車屋のおしゆん、おらん、おもだかやのお花、ますやのおてう、住吉屋のおかんなどは御字じやといふ。(一蝶がいまだ信香といひたりし頃かける。諸國の遊女の繪の中にこの花車屋の圖

あり。ふり袖きたる女門にたてり。西鶴置土産江戸の事を云ふ處。清水町のかくしよね。百で酒肴もてなしさまくなるもあかし。又深川八まんの茶屋ものは。本所築地より各別見よげに。京の祇園町のしかけ程ありて。鳥居の内は二人一分外は三人一分と極め置しも物かたし。右の如く其の名は茶屋なれども。其の實は遊女屋なり。此地は他に比して初より優等なりしものと見ゆ。

武江年表延寶の條に云。永代島八幡宮は。江戸を離れて參詣の輩も稀なりしかば。延寶のころ。社より手前三三町のうち酒肆茶亭をつくり。餘多の女をかへ。洲崎の茶屋と號しけるとなり。此地は海中へ築出したる島にして。遠くは房總の群山。近くは金城芝浦を眺望し。佳景の所にてありしとぞ。そは延寶の江戸圖にて明らむべし。此頃別當永代寺は島を放れてあり今の所と聲し

●深川藝妓

深川の藝妓は「はをり」と稱し。府下第一の評ありしが。天保以來其の數減少し。今は數等の下に下れり。博遊笑覽に云。はをり藝者とは。深川のげいしやより云ふ。明和七年の冊子辰巳園藝者を喚むと云ふ處。はをりにしましやうかといへり。もと女共はをりを著たる故なり。豊後節はやりて此風起れり。柳橋の藝妓は。深川より移りしものよし。東京妓情に云。六七年前岡場所を許されし頃。深川は都門第一の煙花たりしが。越前守水野氏が幕府に閑老たるの日。其淫褻の風自然と市井に移らんことを歎き之を廢したるに。是處に依て活路を

求めたりし妓輩は。俄かに糊口の術を失ひ。如何とも詮方なきに當りて。柳橋は曾て深川通ひの畫舫發する所なれば。遊客自然と集ふならんとの暗算を起し。一人移り二人來り技を賣りしに。果して善くその目的に投じ。隨て酒樓茶肆塵を張り門扉を翻へし。一場の熱地に變じ。歲月の久しき終に純然たる綺羅濛濛とはなれり。此記事以て深川の變遷を徵すべし

深川竹枝原二十 九首 菊地 五山
江口連橋巖若麻。夕陽紅歇送歸鴉。佳期別在水雲裡。一葉扁舟盪猪牙。
結隊紅妝入畫樓。大娘押尾小當頭。對筵並坐嬌無語。偏爲生人耍學羞。
凌晨姊妹兩相携。社下焚香鬢髻低。小步階陰閒處立。手拋玉粒原二十 神鷄。

紅橋翠陌簇香塵。一簾喚家家管領春。舊日門前調馬地。珊瑚鞭遺却屬今人。
細草新裙相映宜。妙音宮畔踏青時。蘆芽一寸堪爲管。玉指挑來信口吹。
穿過彎橋曲曲通。來舟斗與去舟逢。隔簾香霧難明了。纔認語聲輕喚儂。
淺水蘆邊涼似秋。小姑學釣在船頭。玉纖未慣拾竿速。只道癡魚不上鉤。
社頭賽會恒中秋。戶戶珠簾夜不收。問却清光一天月。滿街紅映萬星毬。
月落江頭半夜潮。船家艤艇候歸棹。女奴扶得醉人上。先點毬燈照棧橋。

歡去春寒慟五更。鸞衾獨自睡難成。招同姊妹間相語。早到山鐘第一聲。

夜深兩兩宿鴛鴦。屏掩春雲夢正香。知否眼前秋冷淡。漁簑月白滿天霜。

命薄新從北里移。紅裘只自向鸞知。眉心鬢樣妝成是。猶恐人看認舊時。

深川感懷

粉壁紅樓非舊時。漁家春寂柳如絲。一川風月船來去。不載絃歌載蛤蜊。

丙辰首夏舟過深川

夏淺不淺深川水。春殘不殘新地花。莫使鐘聲排戶入。有人猶夢舊繁華。

●富岡門前山本町

◎位置及區域

富岡門前山本町は。深川公園の西畔に在り。東は富岡門前町の一部と公園に對し。南西は富岡門前仲町に臨み。北は油堀に界す。土地の番號は一より十九に至る。

◎町名の起原並沿革

富岡門前山本町は。もと永代寺の境内にて。元文四年始て商店を開き。永代寺門前山本町と稱す。山本屋十兵衛の開設に係ればなり。延享二年市街に列す。明治二年四月に至り。今の名に改む。町内里俗に矢倉下、裏矢倉、掘繼、金子横町、中横町、馬場通りと唱ふる處あり。

◎景況

當町は公園に接近したる市街にして大通りは最も繁華なり。商店には長野足袋店、大野屋洋品舖、内國通運會社小荷物取扱所、佐原陶器店、川越屋綿絲店、小川屋牛肉店等あり。

●富岡門前町

◎位置及區域

富岡門前町は。其の名の如く。全く公園の前に在りて。中央に大路を控へて左右に分隔し。東は富岡門前東仲町に臨み。西は富岡門前仲町と同山本町に接し。南は河岸を擁して大島川に沿ひ。北は入堀を隔て、公園に對せり。土地を區劃して一より六十五と爲す。

◎町名の起原並沿革

深川富岡門前町は。往昔海邊にて蘆荻叢生の地なりしが。寛永四年老中堀田加賀守及び伊奈半十郎、向井將監臨檢して。八幡宮總境内京間六萬五百八坪を別當永代寺に給與せらる。因て承應二年其の境内に市塵を開き。永代寺門前町と稱す。天和二年十二月二十八日深川燒失後。家作を禁せらる元祿十年官許を得て町人の控地と爲し。永代寺には地子金一ヶ年九十五兩二分と銀五匁二分一厘、夫銀十兩一分と銀十四匁五分二厘を納ることとせり。延享二年閏十二月十八日町方の支配に屬す。明治二年四月。永代八幡宮を富岡八幡神社と改稱するに當り。當町も亦今の名に改め。其の地を公收せり。

◎里俗の稱

八幡町 町内の概稱

馬場通り 舊一の鳥居より東入船町界に至る。
慶安五年七月二十五日。天下安全を禱るが爲め流籠馬執行を仰出され。同八月六日横八間堅三間の馬場を開設し同十五日執行ありしに因る。

- 自身番横町 町内北側横町入口角にも自身番所ありしに因る
- 神橋横町 町内北側、神社裏門に至るを以て名く。
- 十二軒 町内北側、昔時料理店十二軒ありしに因る
- 萬屋横町 町内北側横町入口に萬屋といへる料理店ありしに因る
- 摩利支天横町 町内南側此摩利支天堂ありしに因る
- 濱十三町 町内二十間川河岸通り
- 稻荷横町 町内南側、横町角に稻荷社あるに因る。
- 土橋 八幡社門前より東方東仲町に至る。

◎景況

當町は富岡公園の前通りなるを以て繁榮せり。商家には三十一番地に蒲燒宅川、待合喜樂、三十番地泉榮乾物店、佐野屋下駄店、永井吳服店、二十九番地に田中小間物店、二十五番地に中村屋麵麩製造所、寄席長島亭、大野屋蒲鋒店、長島吳服店、成田山揚まんぢう井筒屋本店、日野屋下駄店、富士屋紙店、駒形唐物店、十四番地に富岡門前郵便局、三番地に萬三河家、新三河家、新山に、五十二番地に待合一鶴等あり。

◎富岡門前東仲町

◎位置及區域

富岡門前東仲町は。公園の南部に在りて。東の一部は突出して汐見橋に達し。他の大部は數矢町に平衡して北に折れ。

◎深川數矢町

◎位置及區域

深川數矢町は。深川公園の東に在り。南北に延びたる方形の市街にして。其の中央に墓地と入堀あり。市塵は其の四縁に環列せり。而して東は大島横川に臨み。南方は全部及び西の一部は富岡門前東仲町に對し。其の一部は河岸を擁して公園に向ひ。北方は油堀を隔て、大和町と呼應せり。土地の番號は二より二十六に至る。

◎町名の起原并沿革

深川數矢町は。舊三十三間堂町及び其の堂地と。宮川町（東北、仙臺堀支流に沿ひし處）入船町代地、東南、大島川に沿ひし處）なり。明治二年十一月之を一町とし。昔時三十三間堂にて。通し矢即ち數矢を射たりし故事に因り。今の町名を附したり。
淺草に在りし舊三十三間堂敷地は。六千二百四十七坪八合あり。元祿十二年五月二十五日當地（永代島築地）にて給與せられし時も。同一の坪數を受領し。舊に仍りて二千四百八十坪八合七勺を市店とせり。三十三間堂町是なり

◎景況

當町の中央は。舊三十三間堂のありし地にして。今は共同墓地に屬し。墓碑散在すれども。貧民の物干場貧兒の運動場となり居るが如き姿なり。川岸通りを點檢するに松本、平野、神山、若林、駿河、織田、沖島、喜多、筒井、鈴木、武房、京福、數井、桑重、鹽崎、駿河新、川島、加藤、立花等の各材

西は富岡門前町に向ひ。南は大島川に限り。北は入堀を隔て、公園に對せり。土地の番號は二より二十九に至る。其の中十四を缺きたり。

◎町名の起原並沿革

富岡門前東仲町は。もと永代寺境内にして。永代寺門前東仲町と稱したる市街なり。承應二年の創立にて。元祿十年より控地と唱へ。永代寺へは一ヶ年地子銀夫銀を併せ。金四十一兩二分と銀三匁四分を納む。延享二年十二月始て町方支配に屬す明治二年四月に至り。今の町名に改めたり。

◎里俗の稱

- 土橋 町内の稱。寶永の頃永代寺東構堀往來を横ざり。南方二十間川に連通跡の際土橋ありしに因る。
- 後ち埋築せしも其の稱殘れり。
- 東横町 北側東方の横町をいふ。
- 永木長屋 東横町の内河岸通り東側にて。長さ凡二十間の處をいふ。往昔永木屋といへる木材商居住せしに因る。

◎景況

當町は深川公園の前通りに在り。且つ洲崎遊廓に通ずる要路なるを以て。晝夜共に繁昌せり。商家には近江屋吳服店、村田屋しる粉店、湊屋吳服店、丸鐵漬物店、割烹伊勢平樓、牛肉店兼清、菓子舗花月堂、山崎茶店、和田屋下駄店、上總屋酒店、山城屋酒店、菓子舗岡塾、稻垣鐵工場、佐藤材木店、不動せんべい伊藤商店、福あられ富屋本店等あり。

木商店並に會席料理榮喜等あり。

◎惠美壽神社

惠美壽神社は。數矢町川岸通り惠美壽橋の北位にあり。社殿は新築のものにて。右に社務所あり。惠美壽神社と題せる金字額を掲ぐ。軒頭に木場とししたる大張灯を吊す。周圍は木柵を廻らし社前にカバ色に塗りたる鳥居一基あり。其の右側に神樂堂。左側に左の如く標示す。

- 毎月二十日月並祭
- 一月十九日
- 十月十九日 大祭

◎深川三十三間堂

深川三十三間堂は。今の數矢町に在りたり。是は京都の蓮華王院を模したるものにて。三十三間と稱するは。堂の長さ普通の二間を一間として。南北へ三十三間（即ち六十六間）あるを以て名く。東西へは四間四面にて廻り縁の堂なり。昔時通し矢を射るの場所たり。本尊には千手觀世音を安置す。觀世音の堂は東へ向ひ。西の縁に射場あり。
寛永十八年 江戸新兩替町の弓師備後と云る者。射術稽古の爲めに幕府に請ひ。地を淺草に賜りて。諸家に勸進し其の資金を以て造立し。同十九年十月二十二日落成せしが。元祿十一年九月六日に至り。火災に罹り。此地に移りぬ。同十四年十

一月新築成る。當時幕府より材木大小千六百本、掛ヶ椽檜木六百挺を下附せられ。諸家より三千五百四十三兩の勸進を得たり。

正保三年四月に。服部權左衛門千三百十本を射通したるを始めとして。嘉永五年三月に鶴田辰太郎正時が五千三百八十三本を射通したるを終りとす。凡此堂に於て射技を試るは。夕刻に開始して翌日の夕刻まで約一晝夜を期とし。夜中は矢先に篝を燦く。射了後其の矢數を書し。姓名を記し堂に届す。後人若し其の以上を射通したる時は。先きの届額を撤し。已れの矢數を書したるを掲ぐ。又百射、千射とて總矢數を百筋若くは千筋と定め。其の中の通し矢を書して届すること前者に同じ。又少年者は半堂射と稱し。堂の中間より試射するの例ありたり。

定

演射者出資額は左の如し。

- 一 白銀五枚 堂銀
- 一 白銀六枚 箭檢見
- 一 鳥目一貫文 燈明錢
- 一 鳥目壹貫文 梁 錢
- 右之通被致 矢數候方より可被出之也
- 一 鳥目一貫文 板 錢
- 一 鳥目一貫文 箭檢見
- 一 鳥目一貫文 札 錢
- 右之通堂前稽古之方より可被出之、勿論堂守へ斷可有之、縁の上より芝矢一切射べからざるもの也、

て弓を射そめ。矢の數かほきをもつて手がらとす。これ弓射る人の拳かたまり勢力つよく。矢筋たゞしうして。一方をもふせや大功ある事をしらしめんがためなるべし。これより諸國大名の城下にみなこの堂形をつくり。弓をけいこせらるるかや。今爰の堂形には本尊千手觀音只一體なり。堂のうしろにて弓を射る事これあり。國もとの堂形にしては。まことに百手はもてながらとをり。終日とをせば數千筋あだ矢もなきを。京都の堂にては。大かたとをりかぬるよし聞えたり。それも數のかざりとをして。金の采牌をとり侍りては。龍門の三級にのぼりし鯉のごとく。いさみよろこぶも理り也。それ大悲の弓をはせて。四魔のいくさを破るは。これ觀音の得ものなれば。此堂にして弓射るも故ありとおぼゆ。

慈悲の弓に智恵の矢はげて觀音也

いはは三十三間の堂

續江戸砂子に云。三十三間堂 八幡の東 鹿鹽久右衛門持本尊千手觀音 京大佛三十三間堂をうつす京より堂間みしかし。京間田舎間のさかひ也。堂のうしろの芝地通し矢等大概京の格也。はじめは淺草にあり。元禄年中此地にうつる。前板に起立の沙門此久右衛門と合體して建立のやうに記したるは誤也。元來此堂は京都の三十三間堂を摸て。東都にて弓術稽古のために寛永年中兩替町弓師備後といふ者願て。淺草におゐて堂屋敷地拜領し。堂全く成就は同十九年十一月なり。右の堂建たる者は此堺屋久右衛門也。材木料滞たるゆへ正保元年十月備後方より久右衛門へわたり。永代久右衛門堂守役に仰付らるゝと也。其後度々御修復料拜領その上諸大名

右之趣御奉行之得御下知候間違背不可有之者也寛文十戊午十二月

梶川勝藏が齡僅かに十二にして。數矢を射しこと武江年表に見ゆ。元禄十六年四月二十一日。石川備中守殿の臣梶川何某の子勝藏十二歳にて。深川三十三間堂に矢數を射る。幕方より翌日午刻迄半堂總數一萬二千二百本、通矢一萬十一本を射る。更に勞れたる氣色なし。終て後主君の若殿來り給ひし困り。又百餘本を射たりしかば。即座に百石の恩祿を給へりとなん。村山三五兵衛と云人の門人也。

江戸名所記に云。これ京都の三十三間の堂形なり。そもく此の三十三間のおこりは。古しへ後鳥羽院ひとつの御願おはしまして。鳳城の左加茂川の東に三十三間の御堂をつくり。一千一體の觀音をすへたてまつり。徳長壽院と名付らる。崇徳院の御宇長承元年みつのえね三月十三日に勅額のくやうをのべ給ふ。道師は天台座主東陽房忠尋僧正なり。上は一人三公卿相雲客。下は洛中邊土の貴賤上下まいりあつまりしに。導師高座にのぼり三時ばかりの説法あり。智辯無窮にして。こと葉の花匂ひをほとこし給へば。數萬の聽衆をのく歡喜の涙を流す。かくて祈願の句に。衆病悉除身心安樂と。たからかにとなへ給ひしかば。そのころ洛中白川にひゞき。齋宮の女御をはじめたてまつり。此聲を聞しともがらすべて二萬三千人。一同にやまひいへたり。此故に此寺を異名には平癒寺と申す也。御布施には千斛千貫砂金千兩。その外被物祿物庭のおもてはさながら山をなせるがごとしまことに大善功とくの寶刹なるに。いつの頃よりか此堂の後の軒を北にむかつ

衆へも寄附金仰出され建立せし事度々也。沙門の事はあとかたもなき妄説也。尤堂番の法師は今も此久右衛門方より附置寶曆十辰年回祿同十四未年先規のごとく諸大名衆へ勸進仰付られ再建なる。明和六巳年大風にて轉倒今に再建なし。

○舊名主役久右衛門の由緒

文政十一年錄上書に云。先祖久右衛門儀は。三州鹿鹽村出生之由に而。慶長年中御當地江罷出。其頃は何れに住居致候哉相分不申。寛永中之頃本材木町五丁目に住居。材木渡世仕罷在候砌。三拾三間堂初而造立之節。諸式引請致候處。出來後代金相渡吳不申に付。弓師備後ト申者相手取。御訴申上候得は。寛永二十一年十一月二日御評定所江一同被召出。其砌堂地一圓拜領被仰付。堂守役被仰付候。後遠方之儀故萬事不行届。手代作左衛門ト申者。淺草堂地へ差置。御用向等爲相勤。正保年中に勘兵衛と申者手代相勤。寛文二寅年三月より治郎右衛門と申者手代相勤罷在候處。元禄七戌年中堂地所町方御支配に。相極。其節久右衛門儀名主役被仰付候に付。淺草堂地へ引移り申候。其後淺草地所御用地に被召上。同十一年寅年中深川只今之地所代地被仰付。其節より同所へ住居仕。堂守名主役共相勤罷在候儀に御座候。

◎深川平富町

◎位置及區域

深川平富町は。大島川の東南岸に在りて區劃して二丁と爲す。其の東北は總て大島川に臨み。南は總て古石場町に對し。西

は佃町に連りたり。土地の番號は左の如し。

- 一丁目 一より三に至る。
- 二丁目 一より四に至る。

●町名の起原並沿革

深川平富町は。一丁目二丁目に分てり。諸藩邸上地、久右衛門町分三左衛門屋鋪、伯隆屋鋪。入船町飛地、佐賀町代地、獵師町等なりしが。明治二年併合して今の町名を附したり。文久二年秋改正の江戸切繪圖には。一丁目の東北隅に入船町とあり。其の他悉く松平越中守の下屋敷たり。二丁目の東北隅に秋葉大権現、瑞蓮寺とありて。其餘は皆榊原式部大輔の下屋鋪たり。

東京案内に云。一丁目自 昔海邊新田に屬し。旗下の士伊勢伊勢守が抱邸の内なりしが。後湯島邊の商人三左衛門及醫員關本伯隆が私有地となり。享保十一年十五年兩度に商家を開き。之を三左衛門屋敷。伯隆屋敷と唱へ。並に府内に列し。久左衛門町の支配たり。明治二年更に町名を加へて今名に改め。郡部に屬し。後市部に復す。五年六月舊高田藩別邸跡を合す町内に大島川あり。

二丁目 本町亦海岸を填築したる地に係る。元祿十五年始めて此地を深川の商人某等が木置場上地の代地に給し。稱して入船町と云ひ。是歳西隣の地亦深川佐賀町代地に給せらるゝを以て當時共に商家を開き。正徳三年市街に列し。寛政三年水災ありて一旦廢したりしも。七年佐賀町代地跡を以て見取場年貢地に改め。入船町跡は文化十四年薬園となり。以て舊幕府の末に至る。明治二年一丁目と同一今名に改め。五年附

近の舊桑名藩別邸跡を併す。川は大島川あり。

●景況

當町は富岡公園の南位に當り蓬萊橋の南東にあり。閑靜なる地にして。倉庫、工場あり。其の大なるものには一丁目に中村味噌製造所。二丁目四番地に合名會社深川精糖所(三十五年二月創立)、深川製粉所、一番地に裁縫教習所等あり。

●深川佃町

●位置及區域

深川佃町は。大島川の南岸に在る小市街にして。東は平富町一丁目に連り。西は牡丹町に接し。南は古石場町に對し。北は大島川に臨めり。土地の番號は僅かに五番地あるに過ぎず

●町名の起原並沿革

深川佃町は。萩原源八郎の土地なりしを。享保四年十月佃島漁業者の助成地として。町奉行大岡越前守より下付せられし所なり。故に此名あり。明治六年に至り助成地を廢し。七年十二月更に町地とせり。里俗に當町を海と唱ふ。往昔當町土手下は即ち海なりしに因れり。

佃島の漁業者は。天正年間より白魚納進等の公課ありしに。享保に至り更に御成先押網(地引網と幾ひと同一のもの)の公課あり。因て漁具の不整を訴へ。此助成地を得たるなり。

●蓬萊橋

蓬萊橋は。大島川に架し。佃町と富岡門前町を連絡す。木製にして長十七間幅二間あり。舊橋は長十六間幅九尺のよし。

現在のものは明治三十一年七月の換架に係る。

●海上の名所 漁釣の場

江戸砂子に深川南方の海上名所並に漁釣場を載せたり左の如し。

- 中川一り半 川は凡八十間ばかり船わたし當所鱸よし
- 丸靱 中川口 ○中瀬 ○黒森
- 東濤 丸よしの東春秋の釣場秋の末大汐みちたる時幸あり
- 小濤 中瀬のさき也汐あひにより大幸ある所
- 横濤 春秋の場也 ○ばらく松
- 砂取 よこみよの先 ○榊木 砂取の酉の方
- 出洲 はうきの酉戌の方よき場也去ながら何の風にもよるしからず
- 三枚洲はうきの卯辰の方千瀉一里ばかり也此洲にて沖よりの波を防
- 横倉 三枚洲の内也 中川口より十六七町辰巳の方春秋ともよき所甚幸あり。右の三枚洲を越て出る事大によろしからず
- 伯父が枳杭 あしき所也 大幸まれ也
- 鎌 よこくらより内卯の方 此所鎌のかたち似たり利根川の落也日和のかんがへあるべき所小汐に大漁の場也
- 貝か水増 鎌より五千丁ほど東 ○蠟燭洲 ○大洲
- 井戸下 淨光寺 利根川の内
- 佃沖 笹濤といふより東を東河洲西を西河洲と云
- 笹濤 ○東河洲 ○西河洲 三箇洲とも春釣の場也

○三ッ合 東河洲の巳午六七丁ばかり汐八合引よりさしかけの間大鱧

- 出洲 ○蛤詩 ○間の洲 出洲の西 ○碓頭
- 前洲 ○榎木 ○眞崎
- 辨天沖 ○上總濤 ○本濤
- 鐵炮洲 佃裏也 濱御殿までの間は八十八夜後鱸場也
- 三尺濤 ○亭の見通 ○赤壁 ○源兵衛濤
- 天王洲 品川天王の社の沖 ○生貝 ○飯頭沖
- 白洲端 ○七軒屋 ○龜崎

●追記

萬徳院は。福住町十六番地に在り。古義派眞言宗にして。京都御室仁和寺の末なり。寛永二十年僧頼因之を開基す。本尊藥師如來は。古金佛にて長さ四寸五分。俗に身代藥師と稱す。

觀音堂には丈六の千手觀音を安置す。安房國那古町那古寺の寫なり。其の胎内佛は弘法大師の作と稱する長二寸一分の千手觀音の像にて府内東方三十三所第三十二番の札所たり。弘法大師の堂あり。府内八十八箇所第三十七番の札所たり。

●西念寺

西念寺は。富岡門前仲町二番地に在り。盛益山と號す。東京中古寺の一にして。初め品川に在り。天正年間僧圓及法籍を眞宗に改め。京都西本願寺末に屬す。寛永十三年八町堀に移り。正保四年今の地に轉せり。

深川有名之墳墓

大塚 信 調査

名	侯	儒	俳諧	書	醫	俳諧	小	力	落	輕	落	國	獄	楯	俳諧	詩	篤	儒				
松	平	蘭	本	田	石	田	一	櫻	花	成	柳	麟	伽	小	山	山	世	守	永	菅	廣	
平	定	藤	忠	玄	常	春	具	井	笠	瀨	亭	麟	羅	山	田	寶	再	原	原	瀨	廣	
信	信	墓	永	常	墓	墓	墓	館	京	門	樂	助	左	衛	右	院	賀	左	東	蒙	廣	
墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓

白河城主任越中守興樂翁
 文政十二癸丑年五月十三日卒年七十二諡守國院殿
 勢州神戶城主本多氏名忠純字大輪號拙齋祖徠高弟
 寶曆丁丑年二月二十九日卒年六十七
 稱丹後守排名清秋能俳諧
 文化十四丁丑年九月十七日卒年九十四
 名世通字子深號愚庵
 文化十二乙亥年正月十八日歿
 名五英字清友稱喜右衛門
 文化九壬申年十一月十七日歿年五十九
 名愚春高梨氏出羽最上人乙二門人
 嘉永六癸丑年十一月十七日歿年七十三
 江戶人號雪志又山興
 寶曆三庚戌年二月二十二日歿年七十九
 通稱豐島新造又稱魯助號純亭
 萬延元庚申年三月二日歿年七十六法名魯純齋
 萬延元庚申年六月六日歿法號勇猛院力譽泰山居士
 落語家也
 安政六己未年十二月二十八日歿
 輕業師也
 寶曆二壬申年一月二十五日歿年四十一
 落語家也
 正德元辛卯年三月七日歿
 初高田正次即後小山田將曹字文儒號松屋
 弘化四丁未年三月二十五日歿年六十五
 世俗稱首切淺右衛門有名者也
 四世寶藏院流繪家號鴛山房權律師
 享保十六辛亥年十二月六日歿
 二世青鹿門人號一口仙又春來軒
 明和元年申年七月十七日歿年七十三法名瑞譽再賀居士
 名伴與字豐通稱才六號鐵齋
 享和三癸亥年三月二十二日歿年八十三
 篤學家也
 文政十一戊子年二月十日歿年九十
 名由字以寧後改仁里稱臺八白河人
 文化十二乙丑年二月十日歿年六十二

寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺
寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺	寺

同	幕	脚	同	同	博	笛	畫	豪	同	同	俳諧	書	茶	崎	俳諧	力	俳諧	同	同	同	同	同	同
同	吏	本	同	同	物	同	商	商	同	同	人	畫	畫	人	諸	士	諸	同	同	同	同	同	同
同	平	木	同	同	與	二	二	二	二	二	三	二	二	二	三	四	代	代	代	代	代	代	代
外	五	魚	住	倉	田	良	良	良	良	良	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡
記	瓶	仙	又	魚	兵	屋	屋	屋	屋	屋	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼	尼
墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓	墓

名師字以止蒙譽男
 明治九丙子年三月五日歿
 名覺定仕幕府勳九書院番
 文政六癸未年四月二十二日自歿年三十三法號歸嚴院殿得譽速證不退居士
 浪岡萬作門人
 文化五戊辰年二月二日歿年五十二(或云六十三)法名彩嶽英蕩居士
 初代五瓶門人通稱藤田金次號萬葉山人
 文政二己卯年七月七日歿年七十二法名善岳淨巧居士
 二代目門人初稱藤田總六後改金次號並木舍
 文政二己卯年七月十四日歿年六十七法名得法直譽居士
 名辰行稱長右衛門
 安政六己未年八月十二日歿法名行主院願樂生西居士
 幼名由之助割場方笛名人
 明治三十六癸卯年十一月三日歿年六十二
 文化十二庚申年六月十七日歿法名鶴卷雪山草湫居士
 名勝義江州神田村人屋簷奈其屋材木商也
 正保二乙酉年六月五日歿法號聖安院心譽道永居士
 神田氏幼名茂松號我妻割髮號安禮
 享保十七己巳年九月三日歿年六十三
 元禄六癸酉年八月三日歿年五十四法名歸性庵相
 伊勢國內宮神官荒木田一有妻
 享保十一丙午年四月二十日歿年六十餘(式云七十四)
 日本橋小田原町魚商也一嗜人而能狂歌談廢魚商爲願人坊主任橋本町
 有名茶人又能書畫
 元禄七甲戌年八月四日卒年七十
 二代目大谷廣治門人排名幡風初名福左衛門
 延享四丁卯年十二月二十五日歿
 加藤氏通稱源藏號伊豆亭
 文化二十二乙亥年八月五日歿年六十七
 天保四癸巳年十月廿日歿
 能登國鳳至郡七海村ノ產
 嘉永四辛亥年十二月廿九日歿年六十一法號常遠院法露日山居士
 排名梅我幼名半三郎大阪人是俳優若井家祖也
 延享九己卯年十一月二十六日歿
 排名杜若三代目養子
 享保十二庚申年三月廿九日歿年五十六
 排名梅我幼名半三郎四代目子
 弘化四丁未年四月六日歿年七十二

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院	院

同 同

代六同 代七同 代八同 花の下道墓 青木十口墓 鶴久子墓 狩野英信墓 同 福王雪岑墓 坂田兵四郎墓 同 山本京四郎墓 山本萬菊墓 袖崎三輪野墓 同 中村新五郎墓 同 嵐野鹽墓 嵐音八墓 坂東彦三郎墓

俳名梅我幼名久次郎五代目長子
天保七丙申年四月八日歿年三十八
俳名紫若五代目二男
弘化二乙巳年四月朔日歿年四十二
俳名若七代目ノ子
明治十五午年二月十九日歿年五十四
塚町芝居業主人也市川白猿門人
天保六乙未年正月十四日歿
寛政三辛亥年七月二十一日歿
享保十五庚戌年十一月十三日歿
明治三十三庚子年十二月十一日歿
憲信男號如瀟翁叙法印
寶曆十三癸未年六月二十一日歿年七十三
名高信英信男
寛政六甲寅年十二月二十五日歿年五十六
名盛勝通稱茂右衛門號白鳳軒
天明五乙巳年三月十八日歿
號聲和
享保二丁酉年六月十一日歿年四十八
俗稱岡村百五郎延壽齋
文政八乙酉年五月二十六日橫死年四十九
延壽齋實子號雲雲
安政二乙卯年九月二十六日歿年五十四
號可中始稱千三郎
明和元甲申年十月二十日歿年五十四
山下金子子幼名金太郎
享保三辛亥年五月十三日歿年二十九
享保二十一丙辰年二月二十六日歿年四十七
貞享二乙丑年九月朔日歿年三十七
元祖中村當十郎實子幼名初五郎
安永六丁酉年十一月十九日歿年三十二
號袖歌元祖中村當十郎門弟始稱加茂川野鹽
安永六丁酉年十一月十九日歿年二十六
俳名和孝初代三五郎門人
明和六己丑年三月二十五日歿年七十二
俳名薪水相州人
寶延四辛亥年正月朔日歿年四十一

同 同

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

同 同

代二同 中村壽三郎墓 富川房信墓 前田青峨墓 辰松入郎兵衛墓 常盤津鈴鹿大夫墓 江戸半太夫墓 堀越菜陽墓 市川左團次墓 同 春風亭柳枝墓 松本交山墓 同 龜岳墓 手柄岡持墓 矢部駿河守墓 追手風喜太郎墓 石井魯石墓 代二伊東燕凌墓 江尻贊山墓 代三嵐七五郎墓 代四市川小團次墓

俳名薪水初代彦三郎子
明和五戊子年五月二十四日歿年二十八
號龍崎
明治二十九丙申年八月三十日歿年六十一
法號演暢院壽山鶴龜日長信士
浮世繪師也
寶曆三癸酉年三月五日歿
沾德派俳人也
寶曆九己卯年四月十六日歿
操偶師也
初代常盤津文字大夫門人
明和三丙戌年五月十日歿
寛保三癸亥年正月二十三日歿
安永七戊戌年二月十八日歿年五十九
俳名松本名高橋榮三
明治三十七甲辰年八月七日歿六十三
法號高操院謙德松高日優居士
先代市川左團次門弟本名中村荒次郎
明治四十四丁未年八月二十七日歿年五十八
法號松月院清風日親居士
本名鈴木文吉諱州櫻枝門人
明治二十三庚子年十一月十四日歿年四十九
名機字眞翠稱文右衛門叙法眼
慶應二丙寅年十月九日歿
名自觀號梅之房交山義子
文久二壬戌年正月二十七日歿年四十九
名常富通稱平澤平格
文化十癸酉年五月十日歿年七十九
名定謙叙從五位下任駿河守
天保十四癸卯年五月二十二日(表向廿三日)卒
法號晴雲院殿秋月日高定謙大居士
駿河藩俗稱和田原喜四郎
文政五壬午年八月十六日歿
安永九庚子年十二月七日歿年五十三
本名漆畑新助初代燕凌門人
安政二乙卯年七月十五日歿年五十六
法名智泉院燕凌日譽
稱莊三郎
萬延元庚申年五月三日歿年五十一
始稱龍藏二代目七五郎弟子
寶政十戊午年十一月五日歿年三十八
三代目小團次門弟俳名米升家號高島屋
慶應二丙寅年五月八日歿年五十五

同 同

寺 寺

告廣うこやじうぞんじのしほ

料香るな用必の人佳士粹士紳顯貴



東京星野の人造麝香
 繁補發賣の人造麝香は他に比類なき純良
 品にて高尚優美の芳香を放ち方今普く天
 下に冠たる高評を博したり常に此人造麝
 香を携帯せば總ての悪臭を防ぎ他人に對
 し身の省懐となり惡疫の感染を豫防し衛
 生的夏季最も必用の佳品也
 繁舖の人造麝香は香水香油石鹼及化粧品
 製造業者間に必用なる用料として歡迎せ
 らる近來種々の産製品あり注意の上御求
 め

香具原料に用る 郵寄代用 定 大瓶六拾五錢
 七匁五分入及び 一割増し 小瓶參拾五錢
 一匁入は時價を 且し運送 價 新小瓶貳拾錢
 以て精々勉強す 料は不用 試用拾錢

登錄商標御注意を乞
 日本發賣元 東京市日本橋區 星野與兵衛
 特約 伊勢町十七番地
 關西 大阪市東區 武田長兵衛
 地方 一手販賣 道徳町二丁目
 代理店 市同區道徳町堀角 小川安兵衛
 全國到處の藥店並に小問物店にて賣捌候

狂歌
 天廼門都龍墓
 橋本雅邦墓

山本氏編纂
 明治十一年六月三十日歿
 京都人晴園男勝川雅信門人
 明治四十一戊申年一月十三日歿年七十三法號謙德院勝園雅邦日讀居士

編輯主任 山下重民
 助修 齊木宗鑑
 圖書擔任 山本松谷
 寫真擔任 吉川庄太郎

○謹告

深川名所に關しては。精細に調査するは勿論なりと雖も。尙ほ遺漏あるを免れ
 ざるべし。因て江湖諸彦の御指示あらんことを望む。又寄稿は左の主任に宛て
 發送を請ふ

四谷區四谷大番町三十四番地
 山下重民

同院

内藤湖南先生編

滿洲寫真帖

精巧なるコロタイプ版
 全壹冊 正價 金壹圓五拾錢
 送料 金 八錢

日露戰役奉天の大捷 あるや先生卒先し
 て當局に説き **奉天の寶庫** に就て學術上の調査を爲
 し又親しく史上の名蹟を跋渉して獲る所極めて多く **滿**
洲 の根本的研究に始めて頭緒を得たりと稱す此帳は當
 時の撮影に係る者にして **寶器、圖籍、史蹟、**
風景 に涉り凡そ一百種を選出し毎版説明を加へたり專
 門の研究者には至大の資料を供給すべく又座右の玩賞に充
 て、臥遊の興を縱にするに足り先生苦心の存する所以にて
 其一端を窺ふべし

寫山要訣

全一冊 定價金一圓
 郵稅金八錢

林學士高島得三君著 二百萬分地質圖添付
 此書ハ地質ノ學理ヲ山水畫法ニ應用セルモノニシテ畫山水
 ト眞山水トノ關係即チ科學ト美術トノ調和ヲ論述セルモノ
 ナリ圖案ノ新奇論說ノ明確ナルト東洋ノ畫法ヲ以テ歐洲ノ
 風景ヲ寫出スルトノ點ニ至リテハ實ニ繪畫界ノ破天荒ト謂
 フベシ

東通 京新 田町 神石 電話 本九 (七〇) 東陽堂 振替 口座 貯金 一〇 九〇 (六番)

此廣告を見取御方は本日名所圖會廣告に御附記を乞ふ

此廣告を見取御方は本日名所圖會廣告に御附記を乞ふ

新撰東京名所圖會

付一冊一每 定價五十錢郵税一錢

○上野公園	○芝公園	○淺草公園	○總町、愛宕、清水谷公園	○深川公園	○隅田川	○東京總説并内廓之部	○神田橋區	○日本橋區	○日
全二冊	全三冊	全三冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全四冊	全四冊	全四冊
○京橋	○芝布	○麻坂	○赤坂	○四谷	○牛込	○小石川	○本郷	○下谷	○淺草
全三冊	全三冊	全二冊	全二冊	全二冊	全三冊	全四冊	全三冊	全三冊	全三冊

綴文圖會

松岡辰方本間百里輯

裝束の綴文は表裏の色様を寫生し相當の位階各家の稱號等を附記し古今の沿革貴賤の區別を明示せり

本間百里輯

服色圖解

衣冠は勿論一切の服色并に劍、笏、扇、香等を圖解し其大様を解説せり

本間百里輯

古來の遺物及び繪巻物戰記等に據りて一切の鎧の形色を圖解し之を明せり

以上三書全六冊一時御購求の諸君へは特に正價金五圓に割引可致 市外は小包料は目方四百目までにて對する料金を申請候

日本隨筆索引

帝國圖書館司書太田爲三郎君著

（總クローズ金文字入）

全一冊 定價金一圓五十錢 送料郵税金八錢

日本畫沿革史

本書ハ我邦太古ヨリ徳川氏ノ末葉ニ至ル迄上下三千年之ヲ六分期ニ於テ日本畫ノ起源發達ノ次第ヲ歴史的ニ編述シタルモノナリ本畫ハ又各時代ニ於ケル斯道ノ大家名手ノ詳傳ヲ掲出シテ流派ノ本枝畫譜ノ系圖ヲ附記シタル

須原長三君著

全一冊 定價金七十五錢 郵税金十錢

扶桑書畫款印集覽

本書ハ上千載ノ古昔ヨリ下現世ニ至ル儒者、詩人、書家、歌人、隱逸、俳人、古畫浮世繪、四條、文人畫等有各名家五百有餘名部門ヲ分チテ其ノ落款及印鑑並ニ手ヲ跡載セル一々小傳ヲ附シタルモノニテ斯道ニ志アルモノ一本ヲ備フルベシ如何ナル古跡ヲモ容易ニ識別スルヲ得ベシ

横須賀靜齋君著

全一冊 定價金一圓十五錢 送料郵税金六錢

本朝畫工便覽

本朝畫工便覽

全一冊 定價金三十五錢 送料郵税金四錢

繪畫哲學論

繪畫哲學論

全一冊 定價金十二錢 送料郵税金二錢

浮世繪備考

浮世繪備考

全一冊 定價金三十錢 送料郵税金四錢

御幸之都合本正價壹圓拾錢郵税六錢
 女帝御裝束本正價壹圓郵税四錢
 錦織物特衣合本正價九十五錢郵税四錢
 裝束綴文圖會一冊正價壹圓拾錢郵税六錢

年代ヨリ其一世ノ傑作著書ノ種別等其一切ノ事項ヲ叙述ス且ツ精製ナル省像畫數種ヲ挿入セリ

關場忠武君編纂○山下重民君校補

浮世繪備考

全一冊 定價金七十五錢 送料郵税金六錢

浮世繪備考

本朝畫工便覽

全一冊 定價金三十五錢 送料郵税金四錢

王香堂畫譚

王香堂畫譚

全二冊 定價金六十錢 送料郵税金六錢

人磨考

人磨考

和裝美本
 定價金壹圓貳拾錢 郵税八錢

本朝畫工便覽

全一冊 定價金三十五錢 送料郵税金四錢

東海道名所圖會

全一六冊
定價 金八十五錢
送料郵税金十二錢

鹿島名所圖會

全一冊
定價 廿一錢
郵税 一錢五厘

小笠原島遊覽圖會

全一冊
定價 十五錢
郵税 一錢

鎌倉名所圖會

全一冊
定價 十五錢
郵税 一錢

香取名所圖會

全一冊
定價 十五錢
郵税 一錢

東京歲事記

全二冊
定價 十五錢
郵税 一錢

發行所 東京神田 通新石町 東陽堂

大日本鐵道線路圖

全一冊
定價 一圓七十五錢
送料六錢

東陽堂發賣 圖書目錄郵

地質調査所報告

第一ヨリ第七迄既刊以下漸次發刊

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

百一萬 大日本帝國地質全圖 全一冊 定價 金七圓 郵税 金六錢

北海道地形圖

全一冊 定價 一圓八十錢 郵税六錢

券二錢御送 附次第呈ス

地質要報

第一號 定價金壹圓六十錢 郵税金八錢

冊數	定價	郵税	合計
一冊	金十五錢	金一錢	金十六錢
五冊	金七十五錢	金七錢	金八十二錢
十冊	金一圓三十五錢	金十三錢	金一圓四十八錢
二十冊	金二圓五十五錢	金二十五錢	金二圓八十錢

注意：本誌は前金御注文の外送本せず。郵券代用は一刻増にて五厘一錢の切手に限る。

明治四十二年一月十七日印刷
明治四十二年一月二十日發行

發行所 吾妻健三郎
編輯人 田中市之助
同市下谷區御徒町一丁目五十五番地

發行所 東京市神田區通新石町三番地
(電話本局 九七〇番) 東陽堂
(郵便振替貯金口座番壹九〇六番)

所	著者	發行所
京橋區尾張町	東海堂	本郷區元宮土町 盛春堂
神田區表神保町	東京堂	神田區神保町 上田屋書店
日本橋區吳服町	北隆館	京橋區銀座四丁目 春祥堂
京橋區錦屋町	良明堂	越後國新潟市 北光社
日本橋區住吉町	至誠堂	越後國新發田 壽藤治吉
大坂東區南町	山陽堂	高知市種崎町 櫻本駒吉
京都寺町二條南	盛文館	名古屋市 寶見文昌堂
京都佛光寺通東入	三共社	信濃國上諏訪町 官坂書店
		鹿兒島市仲町 吉田幸兵衛
		下總國水海道 斷々堂